持続可能な社会を創る資質・能力を培う一実践
ー全校生徒・全教職員で取り組む総合的な学習の時間（グローバル市民科）「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を通してー

小林　伸彦・滝本　穣治

【要約】
平成29年度「しあわせ社会の実現～決めること～」，平成30年度「しあわせ社会の実現～働きかけること～」において残った課題をもとに，令和元（平成31）年度は「しあわせ社会の実現～創ること～」として継続研究を行った。実社会との接点を生み出す場を意図的に設定し，生徒の構想力や実践力を高めることを一層重視しながら研究を進めた。附中ＳＶ制度を活用し，ＳＶの方々に授業に参加していただき，学校内外の人的資源を効果的に活用していった。分析した生徒の記述からは，多様な他者と協働的に学び合う活動を通して自分の在り方や生き方について考えを深めるなど，内省（自己探究・自己更新）しながら学びを深め，持続可能な社会を創る資質・能力が培われている様子を見取ることができた。

【キーワード】持続可能な社会，課題解決型学習プログラム，社会への参画・貢献，
内省（自己探究・自己更新），附中ＳＶ制度，学校内外の人的資源の活用

１　主題設定の理由
(1) 昨今の研究より

これからの社会[1]を創る生徒を育成するには，どのような学びを構想し，実際に展開していけばよいのだろうか。一つの重要なキーワードとして，「持続可能な社会を創るための学び」と考えた。

ユネスコは，地域で活動することを通して世界規模の問題が国内的・地域的な側面を有しながら表面化していることを見抜いていく学びの有効性や必要性を述べている。国内はもちろん，世界における問題や課題は，生徒にとって決して離れた空間で起きているものではないと考える。地球上で生じている問題や課題は，空間的な差異が影響することもあるだろうが生徒の身近な実社会[2]でも生じている可能性が高く，生徒が未来の社会に向けて自分の在り方や生き方を考える上で取り扱うことが有効であると考える。

これからのグローバルな社会に求められる人間形成について，多田は「世界（社会）がつながり，関連性をもって成り立っていることを認識し，さまざまな民族・生物が共存・共生する社会において，多様な文化・価値観などの差異を調整・調和し，また活用し，相手の立場や心情に共感し，イメージでき，利害の対立等の困難さをなんとか克服し，その過程で自己成長・変革しつつ，持続可能な地球社会を構築し，発展させる資質・能力，技能をもった主体的行動力をもつ人間」[3]と述べている。同様に，奈須も「個々の内容について子供の世界との緊密な関連付けを図り，現実世界で展

---

[1] 本校における平成30年度の研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」において「複数の人と構成する空間の総称」と定義した。

[2] 「社会」の一部に含まれるもののうち，一般的に「世の中」「世間」のように表現されるものを「実社会」とし，「社会」とは分けて考えていくことにした。

[3] 多田孝志「グローバル時代の対話型授業の研究―実践のための12の要件―」2017年，東信堂

開されている本物の社会的実践という文脈や状況の中で主体的・対話的に深く学ぶことにより，学びは生きて働くものとなる。」[4]と述べ，学ぶ意義を実感させることができるように実社会と学びとを関連付けた教育課程を構想していくことの重要性を示している。

また，市川は「人間力とは，“社会を構成し運営するとともに，自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力”と定義され，職業生活，市民生活，文化生活といった社会生活を営むのに発揮されるものである。」[5]と述べている。これからの社会を創る資質・能力を育むためには，自立した一人の人間として学びの中で身に付けた力を発揮し，社会に参画・貢献[6]していけるようにすることが求められていると捉えた。さらに，木曽は，持続可能な社会を創るための学習において，「問題を発見する力，解釈のために正しい情報を収集する力，正しい情報に基づき問題解決の方策を見つけだす力，その方策を他者に理解させる力――これら一連の思考力およびそのためのスキルを習得させる必要がある。」[7]とし，課題解決型学習の重要性と求めていくべき力を示している。

以上より，後世にとってもしあわせを感じられる社会創りに向けて，多様性を尊重しながら人間形成の要件を検討し，その資質・能力を育むことができるようにしたいと考えた。生徒と生徒の身の回りの実社会を接続させる工夫をしながら問題解決型の学習を構想していくとともに，その学びを通して生徒が自分のよりよい在り方や生き方について内省[8]（自己探究・自己更新）していくことが重要と捉えた。

(2) 生徒の実態より

本校生徒は基礎的な知識及び技能の習得状況は良好で，様々な習い事に率先して取り組むなど，何事においても知的好奇心が高い。自己向上支援検査（ＳＥＴ：Self Enhancement-support Test）の結果によると，課題関与意欲や他律的意欲，自己向上意欲が高いが，学習効力感や社会的効力感が低く，自立体験が乏しいことが明らかになった。生活に関わることは家族が先回りして用意し，生徒が困らないように手助けしている現状が想定される。

昨年度までの総合的な学習の時間（グローバル市民科）における生徒の学びでは，各学年の講座や全校講座「しあわせ社会の実現～決めること～」の中で，各教科において身に付けた知識及び技能を生かして発表したり，話合い活動で活発な意見交換や新たな意見の創出をしたりすることができていた。しかし，インタビューなどにおいて社会とのつながりを創出する活動では，対象が家族や塾講師といった限られた人材に偏るなど，学校外へ学びを求めていくことに抵抗を感じていることが，どの学年の生徒にもあることが見て取れた。

これらの実態を踏まえ，総合的な学習の時間（グローバル市民科）において，生徒がもつ学習意欲や学習効力感を伸ばしつつ，学んだことが地域などの実社会とつながったり，自分が社会に関わったという体験を伴った学びを獲得したりできるようにすることは，生徒の自己肯定感を高め，自分

---

[4] 奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」2017 年，東洋館出版社

[5] 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会「カリキュラム・イノベーション―新しい学びの創造へ向けて―」2015 年，東京大学出版会

[6] 本校における平成 30 年度の研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」において，「どのような社会であろうと，その空間を互恵的でよりよいものにするために考えを述べたり，行動したりしていくこと」と定義した。

[7] 佐藤学/木曽功/多田孝志/諏訪哲郎「持続可能性の教育―新たなビジョンへ―」2015 年，教育出版

[8] 本校における平成 30 年度の研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」において，多様な他者と共に生きていく中で「自分について探究し，更新していくこと」と定義した。

の「よさ」や「らしさ」を生かすことになり，生徒にとってより価値の高い学びとなると考える。

各教科等で身に付けたことを活用しながら，さらに発展させたり，教科横断的・総合的な学習や探究的な学習によって学びを深めたり，新たな価値ある考えを創り出したりしていく経験を積み重ねたりしていくことが，総合的な学習の時間においては重要である。本校の総合的な学習の時間(グローバル市民科)において，全校生徒・全教職員で取り組む「しあわせ社会の実現」の中で，どのような学びを創出させ，支援していくことで持続可能な社会を創る資質・能力が育まれるかを探究したいと考えた。

以上(1)(2)より，本研究主題を設定した。今年度は，平成29～30年度の研究における成果と課題を踏まえ，研究を進めていくことにした。

2　研究のねらい

全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を通して，持続可能な社会を創る資質・能力を培う。

3　研究の仮説

全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を行えば，持続可能な社会を創る資質・能力を培うことができるだろう。

4　研究の手立て

持続可能な社会を創る資質・能力を培うために，全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～創ること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムを工夫・改善する。

5　基本的な考え方

(1)　「持続可能な社会を創る資質・能力」とは

「持続可能な社会」とは，「持続可能な開発（ＳＤ:Sustainable Development)」によって形成される社会のことであり，ユネスコが「持続可能な社会づくりのための教育(ＥＳＤ:Education for Sustainable Development)」を提唱したことが起源である。「持続可能な開発(あるいは発展)のための教育」または,「持続可能な社会形成(のための教育)」とも呼ばれ，地球温暖化などの環境問題が取り沙汰される近年において，学校現場において推進が求められているものである。

〈持続可能な社会の担い手を育む教育に必要な観点(ユネスコ)〉
① 人格の発達や，自律心，判断力，責任感などの人間性を育むこと
② 他人との関係性，社会との関係性，自然環境との関係性を認識し，「関わり」や「つながり」を尊重できる気持ちを育むこと

ユネスコは，持続可能な社会の担い手を培う教育には，上記二つの観点が必要だとしており，これは，環境教育，国際理解教育などにとどまらず，環境，経済，社会，文化のそれぞれの面からグ

ローバル化が進行する社会において，関係性やつながりを意識して取り組んでいくことが重要であることを示している。現在では,「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ：Sustainable Development Goals）」として理念が受け継がれ，実践が進められている。

グローバル化が進む現代社会において求められる人格形成に向け，安彦は「国境を越えて生きねばならない時代が来たことを，感情的に受け入れるようにするには，“日本人”ではなく“地球人”という感覚・感性の方が気持ちの上で落ち着き，また気分がよい，とする状況を生み出さねばならない。（中略）グローバルな視野をもつことの必要感とその価値感情が十分満たされる時代になりつつあることを，最大・最高の常識・良識として，メンバー相互に認める社会にならざるをえなくなっていく。これは一種の“教養”ないし“視野”の問題で，教育の“内容”面における“地球的視野”“相互依存”“多様性”を受け容れるよう求めている。」[9]と述べ，髙木は「他者や事象に積極的に関わり，自分の視野や経験を広げ，自分自身で価値を見出しながら，社会を生き抜くことで，明るい未来を創り上げる」[10]と述べている。二人の考え方からは，他者とのつながりを大切にしながら価値判断や意思決定を行っていく学びが，今後一層求められることを示唆していると考える。

以上を踏まえて,「持続可能な社会を創る資質・能力」を次のように設定した[11]。

○　グローバルな視点で身近な地域で起きている問題に関心をもち，その解決に向けて身に付けたことを活用しながら主体的に判断したり，今後も責任をもって関わったりしていこうとする。 ○　周りの人や社会，自然などとの関係を考え,「関わり」や「つながり」が大切であることを理解し，よりよい社会創りを尊重していこうとする。

(2)　「講座『しあわせ社会の実現～創ること～』」とは

①　平成 29 年度「しあわせ社会の実現～決めること～」の成果と課題

本校では,平成 29 年度に「しあわせ社会の実現～決めること～」を実践した。ねらいの中心にしたことは,社会参加の態度の育成と政治的リテラシーの涵養である（**図１**）。講座を進める際,家族や一般の方，行政機関など，社会を構成する多様な他者と対話したり議論したりする場を意図的に設定していった。生徒を取り巻く社会に生きる人々の多様な生の声（専門家,行政関係

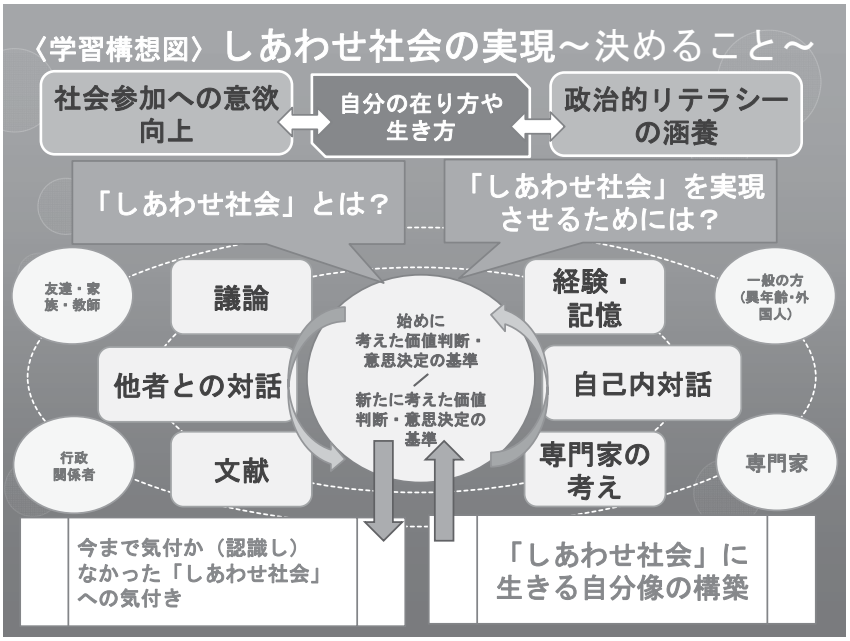


図１　学習構想図

---

[9]　安彦忠彦「“コンピテンシー・ベース”を超える授業づくり－人格形成を見すえた能力育成をめざして－」2014 年，図書文化社

[10]　髙木展郎「“これからの時代に求められる資質・能力の育成”とは―アクティブな学びを通して―」2016 年，東洋館出版社

[11]　茨城大学教育学部附属中学校「研究紀要〈第 46 集〉平成 29 年度」p. 118 と同様に設定

者，家族，友達，異年齢の日本人，外国の方など）を直接聞かせていくことで，自分と社会を関連付けながら「しあわせ社会」と向き合うことができるようにしていった。生徒は，自分や身近な地域で起きている問題や課題に対し，主体的に社会と関わっていく責任や義務，使命に対する認識を深めながら，そこに生きる自分の在り方や生き方について内省（自己探究・自己更新）し，「しあわせ社会」に生きる自分像を構築していった。

成果としては，誰もがしあわせに生活を送ることができる社会の実現を目指し，様々な他者，情報などと関わりながら方策をまとめることができたことがあげられる。さらには，生徒同士でベストプレゼングループを選出し，その代表生徒は県知事や衆議院議員を前にして，熟考した方策や提言を堂々とプレゼンすることができた。生徒の振り返りを分析すると，少子高齢化などの身近な社会問題に関心を抱き，自分の経験と知識を照らし合わせながら，どのようにそれらの問題と向き合っていくかという，持続可能な社会を創る資質・能力の育成に効果が見られた。

一方，課題は，対話を通してグループが定義付けた「しあわせ社会」像に対して現状を調査して提言をまとめるところまでは進んだが，時間（時数）の関係で働きかけ―実践・行動―までは至らなかったことである。学びと社会とをつなげ，自分の在り方や生き方について考えを深めることで，生徒は学ぶ意義を実感し，社会に参画・貢献できるように自分を成長させていくと考えた。

② 平成 30 年度「しあわせ社会の実現～働きかけること～」の成果と課題

平成 30 年度に持続可能な社会を創る資質・能力を培うために，全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間（グローバル市民科）「しあわせ社会の実現～働きかけること～」を工夫・改善を図ったところ，次のような成果と課題が明らかになった。

成果は，「しあわせ社会」を定義付けるためや，自分たちが働きかけようとしていることが実社会において妥当性のあるものかを検討するために，多様性が進む社会と生徒との接点を生み出しながら学びを深めることができたことである。このことは，持続可能な社会を構築していくための資質・能力を培う上で有効だったと捉えた。

また，総合的な学習の時間（グローバル市民科）の全体構想として，学年講座（横の連携）や異学年交流（縦の連携）という視点から，「しあわせ社会」を定義付けるため，哲学的に抽象的な概念を構築（平成 28 年度第３学年「哲学すること」，平成 30 年度第２学年「『問い』をもつ」において実践）し，少しずつ思考を深めていく一連の活動は，たいへん意義深い本校ならではの学びとなってきた。縦割り交流班を活用しながら全校生徒で取り組んでいることについても，多様性を重視した学び合いの視点から，今後も研究と実践を継続していくべきと捉えた。

課題は，実社会に生きる外部人材を積極的に活用し，対話する場をもっと多く設けることで，共に学びを創り上げる講座にしていくのが理想であることや，生徒が実社会に赴くことは何度もあったが，深く関わり続ける人的な交流を図れるようにすることである。また，学校と実社会との接点を一層生み出していく工夫をする。例えば，実社会で生活されている方々に授業に参加していただき生徒の学びを支えていただくような工夫をすることで，生徒は「学び」「実社会」「自分」を関連付けながら講座を進めていけるようになるのではないかと考えた。

③ 平成 31（令和元）年度「しあわせ社会の実現～創ること～」の構想

①②における成果と課題を踏まえ，令和元（平成 31）年度は，全校講座「しあわせ社会の実現～創ること～」を実践していくことにした。平成 30 年度のように生徒が実社会に出向くだけでなく，

学校内外の人的資源を日常の授業に招き入れながら生徒の学びをサポートしていただく人的環境を整備し，ネットワークを構築しながら「社会とともに社会を創る」学びの構築にあたっていく。本講座で目指すものは，よりよい未来の実現に向けて働きかけていく持続可能な社会を創る資質・能力を育むことである。身の回りの社会に問い[12]を見いだし，見つめ直すとともに，公共の福祉を具現化するための手立てを検討し，生徒一人一人が一主権者として社会に参画・貢献[13]していく自分の在り方や生き方について考えられるようにする。

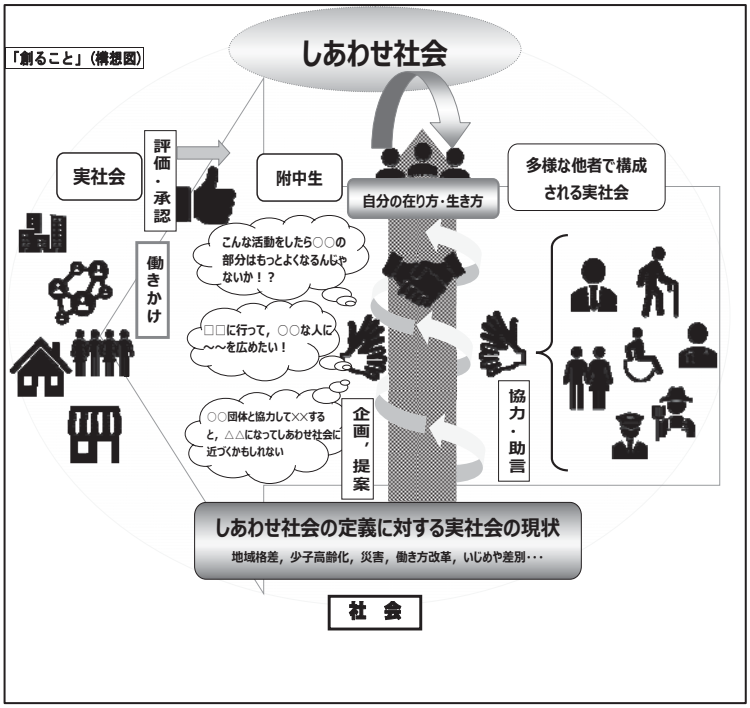


図２　学習構想図②

計画を進めるにあたっては，令和元（平成 31）年度も生徒が実社会と学校との接点を重視し，実社会と学校とを往還しながら学びが深まるように取組を工夫・改善していく（**図２**）。その中で，生徒は学びを振り返るとともに，しあわせな社会を創るためにどのように社会に参画・貢献していくべきか，自分の在り方や生き方について内省（自己探究・自己更新）していけるように，より一層支援していくことにした。

④　「附中スクールボランティア制度（以下「附中ＳＶ制度」）とは

本校では，「社会」を「人と人とが構築する空間の総称」，「地域」を「生徒の身の回りのコミュニティ」と捉えている。人が複数集まれば，その空間をよりよくするための「社会」が創られ，生徒が遠く離れた県外で体験活動を行えば，その空間も生徒にとっては大切な「地域」と考えていく。

本校は，平成 10 年に「附中ＳＶ制度」を発足し，地域人材を積極的に活用しながら生徒の学びを支えるシステム構築に当たってきた。この制度の大きな特徴は，週に一度スクールボランティアコーディネーター（以下「ＳＶＣ」）が来校し，教員と実社会とをつなぐサポートを行ってくれていることである。年度はじめの保護者会において制度設

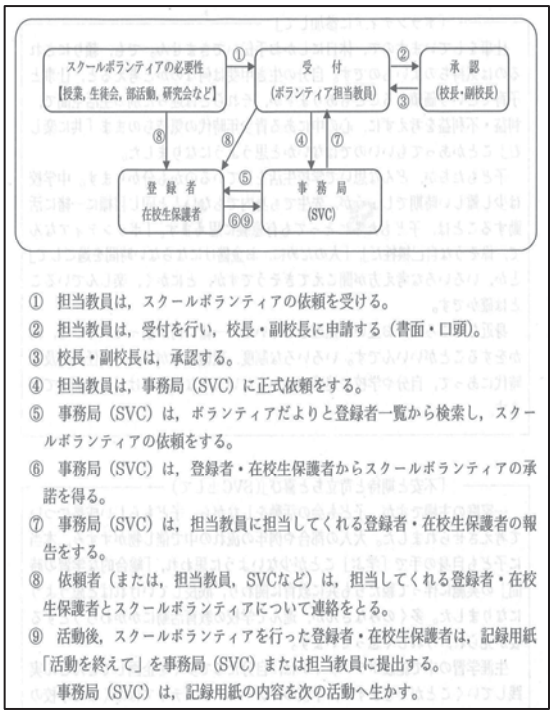


図３「附中スクールボランティア制度」の流れ

[12] 本校では「知的好奇心が触発されたことにより，既有の知識や経験との整合を図ろうとしたり，より深く追究しようとしたりする思いの表れ」と定義した。

[13] 本校では「どのような社会であろうと，その空間を互恵的でよりよいものにするために考えを述べたり，行動したりしていくこと」と定義した。

立の経緯や活動の趣旨を説明し，登録者募集を依頼している。年間を通して随時登録を受け付けている。平成 30 年度は制度創設 20 年目に当たり，ＳＶＣが主体となって保護者対象に説明会を行うなど,意欲的に活動していただいた。ホームページ上にもスクールボランティア(以下「ＳＶ」)のコーナーを設けたり，活動の様子をブログにアップしたり，附中ＳＶだよりを発行したりするなど，生徒の学びをサポートする環境づくりに努めている(**図４～６**)。

平成30年4月14日

保護者 様

茨城大学教育学部附属中学校 校長 [illegible]

「附中スクールボランティア」登録者募集について（お願い）

春陽の候，皆様におかれましては，ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より本校の教育にご理解とご支援を賜り，厚く御礼申し上げます。

「附中スクールボランティア」制度について，お問い合わせを頂戴 申し上げます。本校では，平成 11 年度に文部省（現文部科学省）から研究開発学校の指定を受けて「総合的な学習の時間」の在り方について研究を始めるに当たり，「附中スクールボランティア」制度を立ち上げました。これは，生徒個々の興味・関心を生かし，生徒が意欲的・主体的に取り組むためには，個に応じたきめ細かな支援が必要であること，また，教育は学校のみで行われるものではなく，地域・社会が連携して役割を担うべきものであること，さらに，多様な人々との関わりが子どもたちの学びに必要なこと等の生徒の実態やこれからの教育の向かうべき方向を踏まえて構築したシステムです。これまでに本校住・卒業生の保護者，本校卒業生，茨城大学の学生や教育大学の学生，学校近隣に お住まいの皆様の方，本校校の方などに共感していただいた協力内容の在方の方等，多くの方々のご支援，ご協力をいただいて運営してまいりました。皆様のご協力によりまして，本年度は「総合的な学習の時間」のみならず，教科の授業，学校行事，部活動等でも大きな成果をあげています。

つきましては，本年度の登録者を下記のとおり募集いたします。ボランティア活動は，生徒のためになるのはもちろんのことと，ボランティアにご協力いただける方にとっても自己実現の良い機会になります。また，活動や学習に関する他の方と接触を深めることも考えております。本校のスクールボランティアには，特に資格や技術は必要ありませんので，ぜひご登録くださいますようお願い申し上げます。

記

1 活動内容　本校生徒の学習支援等
※ 各教科，道徳，総合的な学習の時間(グローバル市民科)，特別活動，各種行事，部活動 等

2 募集人数　制限はありません
※ 1人でも多くの皆様のご登録をお待ちしております。

3 登録期間　随時受け付けます。

4 登録方法　別紙の登録票に必要事項をご記入のうえ，各学級担任までご提出ください。

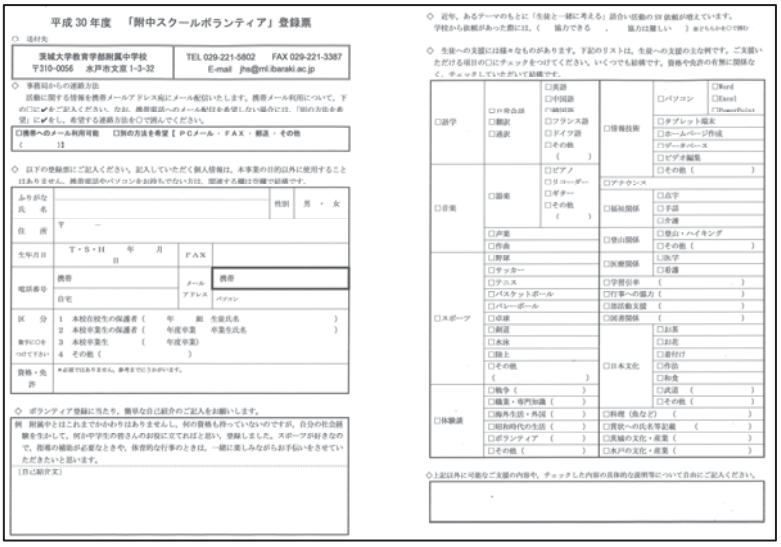
5 保険加入　登録者には，原則としてボランティア活動保険（公益財団法人日本財団協会ボランティアについて活動保険）を利用（に加入していただいております。
※ ボランティア活動保険への加入手続きは，スクールボランティアコーディネーターが代行致します。
※ 加入していただく保険は，ボランティア活動中及び活動場所までの往復時におけるケガ，熱中症，食中毒などの保険対象になります。
※ 他のボランティア団体に所属しているなど，すでにボランティア活動保険に加入している場合は，お申し出ください。

6 活動への申し込み　まちｍａｉｌメール等を利用し，スクールボランティア募集のお知らせを配信します。実施にしたがって参加をお申し込みください。
※ スクールボランティアコーディネーターから，電話やメールにて，直接参加のお願いをすることもあります。
※ 携帯電話やパソコンでＥｍａｉｌを利用しない方には，ＦＡＸもしくは郵送で募集のお知らせを送付いたします。

7 その他　○ 活動の様子等，詳細については本校ホームページをご覧ください。
○ ご不明な点等がありましたら，担当者までお問い合わせください。

茨城大学教育学部附属中学校スクールボランティア担当 教諭 小林，宇佐
TEL 029-221-5802　FAX 029-221-3387　E-mail jhs@ml.ibaraki.ac.jp

図４　ＳＶ登録者募集(依頼)



平成 30 年度　「附中スクールボランティア」登録票

○ 送付先

茨城大学教育学部附属中学校 〒310-0056　水戸市文京 1-3-32	TEL 029-221-5802　FAX 029-221-3387 E-mail jhs@ml.ibaraki.ac.jp

◇ 事務局からの連絡方法
活動に関する情報を携帯メールアドレス宛にメール配信いたします。携帯メール利用について，下の□にレを□記入ください。なお，携帯宛ててのメール配信を希望しない場合には，「別の方法を希望」にレを入し，希望する連絡方法を○で囲んでください。

□携帯へのメール利用可能　□別の方法を希望（ＰＣメール・ＦＡＸ・郵送・その他
（　　）

◇ 以下の登録票にご記入ください。記入していただく個人情報は，本事業の目的以外に使用することはありません。携帯電話やパソコンをお持ちでない方は，関連する欄は空欄で結構です。

ふりがな 氏　名		性別	男　・　女
住　所	〒　－		
生年月日	T・S・H　年　月　日	FAX	
電話番号	携帯 自宅	メールアドレス	携帯 パソコン
区　分 該当するものに○をつけてください	1 本校在校生の保護者（　年　組　生徒氏名　） 2 本校卒業生の保護者（　年度卒業　卒業生氏名　） 3 本校卒業生　（　年度卒業） 4 その他（　）		
資格・免許	※必要ではありません。参考までにうかがいます。		

◇ ボランティア登録にあたり，簡単な自己紹介のご記入をお願いします。

例　附属中とはこれまでかかわりはありませんし，何の資格も持っていないのですが，自分の社会経験を生かして，何か中学生の皆さんのお役に立てればと思い，登録しました。スポーツが好きなので，指導の補助が必要なときや，体育的な行事のときは，一緒に楽しみながらお手伝いをさせていただきたいと思います。

[自己紹介文]

◇ 近年，あるテーマのもとに「生徒と一緒に考える」部合い活動の SV 依頼が増えています。学校から依頼があった際には，（　協力できる　，　協力は難しい　）ぜひともよろしくお願い

◇ 生徒への支援には様々なものがあります。下記のリストは，生徒への支援の主な例です。ご支援いただける項目の□にチェックをつけてください。いくつでも結構です。資格や免許の有無に関係なく，チェックしていただいて結構です。

□語学	□日常会話 □翻訳 □通訳	□情報技術	□パソコン　□Word　□Excel　□PowerPoint □タブレット端末 □ホームページ作成 □データベース □ビデオ編集 □その他（　）
□音楽	□ピアノ □ヴィオリン □ギター □その他（　） □器楽	□アナウンス	
		□福祉関係	□点字 □手話 □介護
	□声楽 □作曲	□登山関係	□登山・ハイキング □その他（　）
□スポーツ	□野球 □サッカー □テニス □バスケットボール □バレーボール □卓球 □剣道 □水泳 □陸上 □その他 （　）	□医療関係	□医学 □看護
		□学習分野	（　）
		□行事への協力	（　）
		□部活動支援	（　）
		□関書関係	（　）
		□日本文化	□お茶 □お花 □着付け □作法 □和食 □武道（　） □その他（　）
□体験談	□戦争（　） □職業・専門知識（　） □海外生活・外国（　） □昭和時代の生活（　） □ボランティア（　） □その他（　）		
		□料理（魚など）（　）	
		□貴重への氏名等記載（　）	
		□実験の文化・産業（　）	
		□水戸の文化・産業（　）	

◇上記以外に可能なご支援の内容や，チェックした内容の具体的な説明等について自由にご記入ください。

図５　附中ＳＶ登録票

図６　附中ＳＶだより(H30. No. １～６)

⑤　計画

全校講座「しあわせ社会の実現～創ること～」を下のように計画し，進めていくことにした。

予定月	時数	予定日	探究のプロセス	主な学習内容	備考
4月	1	4/16 火⑤	なし	○　グローバル市民科ガイダンス ・縦割り交流班で交流しつつ，昨年度のグローバル市民科で学んだ内容を下級生に報告する。	〈担当：総合部〉
	2	4/19 金⑤	課題設定への意欲付け	○　全校総合ガイダンスを受け，講座のねらいと見通しをもつ。 ○　前年度までの学びを生徒同士で情報交換し，学びのつながりを意識化させる。 ○「しあわせ社会」とは何かについて問い直す。	〈担当：総合部〉 全体で体育館 縦割り交流班 G
	3	4/22 月④	情報の収集	○「しあわせ社会」とは何か，グループごとに協議する。 ○　附属中生以外の方は「しあわせ社会」をどう捉えるのか，インタビュー計画を立案する。 ※生徒一人につき3名，立場の異なる方へ実施	〈担当：各担当〉 縦割り交流班の活動教室
5月		GW中	情報の収集	インタビューの実施	
	4	5/8 水⑤	課題への視点の設定	○　インタビューの結果をグループで共有する。 ○　各グループにおいて「しあわせ社会」の定義を決定する。	〈担当：各担当〉 縦割り交流班の活動教室
	5	5/10 金⑤			
	6	5/21 火④	課題への視点の設定	○　定義付けた「しあわせ社会」に対し，実社会の中で達成できていないことや変わってほしいと思っていることは何か，自分の考えを伝え合う。	〈担当：各担当〉 縦割り交流班の活動教室 ＋SV2～3名
6月	7 8	6/13 木⑤ 6/28 金⑤	課題の設定	○「働きかけること」の候補を検討する。どのような視点で，どこ（誰）を対象に働きかけるか，その効果は期待できるか，幅広く意見を出して発想を広げる。 〈視点／多面的〉 ・産業面　・インフラ整備　・子育て支援 ・経済面　・高齢者福祉 ・原子力発電　・自然や環境保全　・職業 〈誰／多角的〉 ・年代ごとに分けて調査 ・地域に関わりのある外国人への調査	〈担当：各担当〉

7月	9 10	7/3 水⑤⑥	課題の設定	○　定義付けた「しあわせ社会」が（一部でもいいので）本当に実現できるか，等について多面的に検討し，縦割り交流班で一つずつ「働きかけること」を具体的に決定する。 （検討する視点） ・実社会とともに「しあわせ社会」を創ろうとしているか ・中学生ができる「働きかけ」となっているか ・「働きかけ」の達成度を客観的に評価できるか	〈担当：各担当〉 縦割り交流班の活動教室 ＋SV2～3名
	11	7/9 火⑥	課題の設定	○　決定した「働きかけ」をいつ，どこで，何のための活動か，どのように行うか，企画書を立案・作成する ・グループ全員で同じ場所，同じ内容に取り組むことを確認する。 ・企画書を作成しながら，「働きかけること」のねらいや目標を再度認識する。	〈担当：各担当〉 ・外部機関との連携が必要な場合は，前時から詳細を確認しておく。SVCへの依頼は遅くても二週間前
夏季休業中				○　各自で情報収集や働きかけの準備を進める。	
9月	12 13	9/10 火⑥ 9/24 火⑥		○　各グループで，企画書に基づいて活動する。 ・事業所や企業など外部の方と接触する場合は，担当教員やSVCと相談しながら事前アポイントを取る。（要指導）	〈担当：各担当〉
10月～11月	14 15	10/28 月⑤ 11/27 水④	まとめ・表現	○　働きかけを振り返り，自分たちの変化や社会の変化を客観的に捉え，資料にまとめる。 ・中学生としての視点と，社会からの視点を区別して振り返るようにする。 ・効果を検証しながら，これまでの活動がどのように社会を創ることにつながったか振り返る。	
12月	16	12／2 月⑤		○　振り返りを行う。 ・各教科等の学びを生かせたか，自分たちで社会に働きかけることができるという実感が得られたか，この先も社会に関わろうとする意欲が高まったか，等の視点から，個人で振り返る。	〈担当：各担当〉 振り返り用紙に記入

(3) 「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム」の工夫・改善とは

「しあわせ社会の実現」における学習構想について考える。平成29年度の全校講座「しあわせ社会の実現～決めること～」を構想した際に重視したことは，多様な価値観を有する他者と誰もがしあわせな社会を創るには，どのような価値判断や意思決定を行っていくべきかについて，一人一人が探究していくことにあった。その根底にあったのは，グローバル化社会の進行や外国人の移民や難民受け入れに関わる問題，性的少数者等に関わる人権問題など社会問題を考慮したことはもちろん，本校生徒の実態として，少数ではあるが他者との関係を遮断することがあったり，他者と交流することを拒み特定の人間関係のもと生活したりする様子が見られ，危惧した背景がある。学年の枠を越えて，多様な価値観を有する他者とともに協同的に学び合うとともに，「共生」について改めて深く考えさせていきたいと構想したことが発端である。

佐藤らは「『共生』という言葉は，人間同士のかかわり，人間の生き方，あるいは人間と環境のあるべき姿を示す言葉として用いられている。」[14]とし，「共生」は人間同士の関わりやその中で生活する自分の在り方や生き方，人間を取り巻く環境について考えていくべきであることを述べ，三つの視点を示している。また，自分事となった時に共生に向けた行動化が果たせるようになると述べており，解決すべき共生に向けた環境改善などの課題は，生徒の身近にあるものを設定していくことを考えた。平成30年度は，前年度の課題を受けて，生徒の身の回りの社会や実社会との接点を創出し，しあわせ社会の実現に向けて実際に働きかけていくことを重視することにした。

Ｊ．デューイは「社会的探究に取り組む人間とは，本質的に“協働探究者”であり，他の探究者とともに問題への関心を共有し，探究過程で対話する能力を培い，相互の意味体系を豊かにするよう協力し合う」[15]とし，多様な他者と協同的に問題解決する学習の有効性について述べている。また，(平成29年度からの実践に向けて参考にした)論点整理[16]では，これからの時代に求められる人間の在り方として「社会の中で自ら問いを立て，解決方法を探索して計画を実行し，問題を解決に導き新たな価値を創造していくとともに新たな問題の発見・解決につなげていくことのできる人間であること」が掲げられ，実社会との接点を重視しながら身に付けた知識及び技能を活用していく学びが，今後一層重視されている。さらに，協同的に学び合う他者の存在について，佐伯は「大切なことは，実際に対話的な交流をもつことができて，内的対話(吟味・評価・批判・反省など)を豊かにし，学びがいのある学びに導いてくれる存在である。」[17]と述べている。

以上のことを踏まえ，本講座では，多様性が進む社会を学校内にも創出させながら協働的に学びを深めていきたいと考え，全校生徒で構成した縦割り交流班[18]を基本単位として構想することにした。また，学校と実社会とを円滑につなぐため，本校の教育システムの特色である「附中ＳＶ制度」を活用していくことにし，生徒が実社会に出かけて主体的に学んだり，実社会に生きる人材を学校に招いたりすることで，実社会を学校に取り込みながら学びを深めていけるように工夫していく。学校内外における人的環境を有効に活用しながら，他者に対して根拠とともに自分の考えを明確に説明したり，対話や議論を通じて相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりしていく中で，協働的に持続可能な社会を創る資質・能力を培っていけるようにしていく。

---

[14] 佐藤郡衛，佐藤裕之「『共に生きる子ども』を育てる国際理解教育」教育出版，2006年

[15] Ｊ．デューイ，阿部斉訳「現代政治の基礎―公衆とその諸問題―」岩波書店，1969年

[16] 中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会，2015年8月

[17] 佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」岩波新書，1995年

[18] 平成29年度は，各学年男１女１の計６名を基本とした交流班を構成し，80班編成で進めた。

６　実践

職員への配付資料をもとに，実践を振り返る。

(1) 第１時：グローバル市民科ガイダンス［全校生徒・体育館］

①　ねらい

○　グローバル市民科のガイダンスに参加することで，今後，高めていきたい資質・能力について共通理解を図ることができるようにする。

○　今後，活動を共にする縦割り交流班のメンバーや担当教師との顔合わせをする。

②　準備

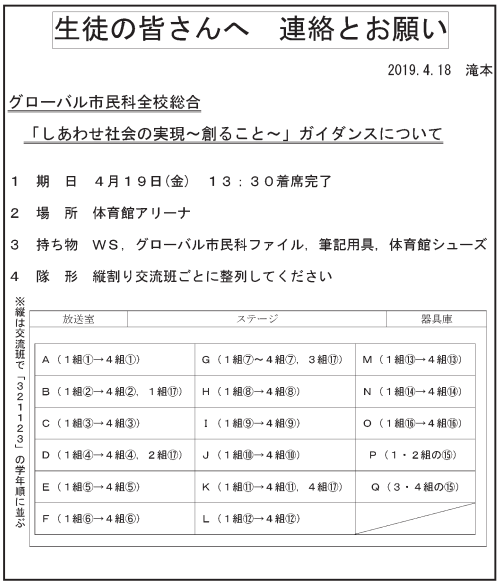
○　教師：PC，プロジェクター，マイク，ワークシート，配付資料

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

③　生徒の活動と学びの様子

平成 30 年度のグローバル市民科において，どのような学びを経験することができたのか，３年生の代表生徒が最も深く学ぶことができた学年講座について発表を行った。代表生徒の発表後，縦割り交流班ごとに，２・３年生から１年生に対し，自分のグループおける平成 30 年度における学びについて，成果物やファイル内の資料をもとに発表を行った。平成 30 年度の学びを発表することで，はじめてグローバル市民科を学ぶ１年生はもちろん，改めて全体で高めていきたい資質・能力や学年講座における学びについて共通理解を図ることができた。

急速に変化しつつあり，多様性が進む社会の中で，主体的な態度で課題を見出し，粘り強く解決を図っていく中で，自分の生き方や在り方を考えていくことなどが重要であることを確認することができた。



生徒の皆さんへ　連絡とお願い

2019.4.18　滝本

グローバル市民科全校総合

「しあわせ社会の実現～創ること～」ガイダンスについて

1　期　日　４月１９日(金)　１３：３０着席完了

2　場　所　体育館アリーナ

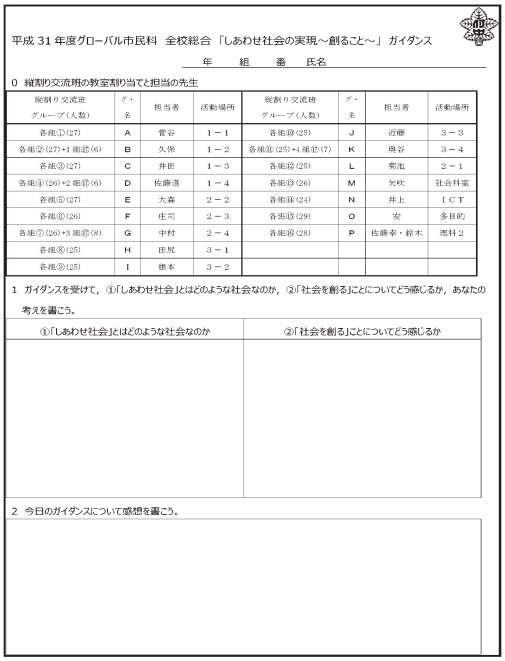
3　持ち物　ＷＳ，グローバル市民科ファイル，筆記用具，体育館シューズ

4　隊　形　縦割り交流班ごとに整列してください

※縦は交流班で「３２１１２３」の学年順に並ぶ

放送室	ステージ	器具庫
Ａ（１組①→４組①）	Ｇ（１組⑦～４組⑦，３組⑰）	Ｍ（１組⑬→４組⑬）
Ｂ（１組②→４組②，１組⑰）	Ｈ（１組⑧→４組⑧）	Ｎ（１組⑭→４組⑭）
Ｃ（１組③→４組③）	Ｉ（１組⑨→４組⑨）	Ｏ（１組⑯→４組⑯）
Ｄ（１組④→４組④，２組⑰）	Ｊ（１組⑩→４組⑩）	Ｐ（１・２組の⑮）
Ｅ（１組⑤→４組⑤）	Ｋ（１組⑪→４組⑪，４組⑰）	Ｑ（３・４組の⑮）
Ｆ（１組⑥→４組⑥）	Ｌ（１組⑫→４組⑫）	

図７　配付資料①



平成 31 年度グローバル市民科　全校総合「しあわせ社会の実現～創ること～」ガイダンス

年　組　番　氏名

0　縦割り交流班の教室割り当てと担当の先生

縦割り交流班 グループ（人数）	グ・名	担当者	活動場所	縦割り交流班 グループ（人数）	グ・名	担当者	活動場所
各組①(27)	A	菅谷	１－１	各組⑩(25)	J	近藤	３－３
各組②(27)+1 組⑰(6)	B	久保	１－２	各組⑪(25)+4 組⑰(7)	K	奥谷	３－４
各組③(27)	C	井田	１－３	各組⑫(25)	L	菊池	２－１
各組④(26)+2 組⑰(6)	D	佐藤進	１－４	各組⑬(26)	M	矢吹	社会科室
各組⑤(27)	E	大森	２－２	各組⑭(24)	N	井上	ＩＣＴ
各組⑥(26)	F	庄司	２－３	各班⑮(29)	O	安	多目的
各組⑦(26)+3 組⑰(8)	G	中村	２－４	各組⑯(28)	P	佐藤幸・鈴木	理科２
各組⑧(25)	H	田尻	３－１				
各組⑨(25)	I	樋本	３－２				

1　ガイダンスを受けて，①「しあわせ社会」とはどのような社会なのか，②「社会を創る」ことについてどう感じるか，あなたの考えを書こう。

①「しあわせ社会」とはどのような社会なのか	②「社会を創る」ことについてどう感じるか

2　今日のガイダンスについて感想を書こう。

図８　配付資料②

図９　授業の様子①

⑵ 第２時：全校総合ガイダンス［全校生徒・体育館］

① ねらい

○ 全校総合のガイダンスに参加することで講座のねらいを理解するとともに，今年度の見通しをもつことができる。

○ 平成 30 年度までの学びの成果を報告し合う活動を通して，学びのつながりを意識することができる。

○ 「しあわせ社会」とは何かについて問い直すことができる。

② 準備

○ 教師：PC，プロジェクター，マイク，ワークシート

○ 生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

③ 生徒の活動と学びの様子

全校総合「しあわせ社会の実現～創ること～」のガイダンスを行った。講座のねらいを生徒と確認し，目指すゴールを共有した。また，今年度の見通しを確認することもできた。平成 30 年度は，異なるグループの交流会を行う時間がもてなかったため，互いの「しあわせ社会」に対する考え方の背景にあるものや働きかけたことについて共有できなかったため，このガイダンスは有意義な時間になった。また，時間に余裕が生じた縦割り交流班では，３年生が平成 29 年度(1 年生の時)の取組について，１・２年生に伝えている姿も多く見られた。

体育館内にはグローバル市民科係などが中心となって準備した，平成 30 年度の成果物を掲示し，自由に閲覧できるようにした。また，体育館アリーナに続く通路には，平成 29 年度の成果物を掲示した。本講座「しあわせ社会の実現」における学びは３年目となり，今年度の展開に向けて効果的な動機付けとなった。授業の終末には，縦割り交流班のグループ長など，組織づくりを行うとともに，改めて「しあわせ社会」とは何かについて，問い直しをする時間を設定した。

グループ長報告用紙

グループ	グループ長	（３－　　）氏名：
	副グループ長	（３－　　）氏名：
		（３－　　）氏名：
		（３－　　）氏名：

図 10　配付資料③

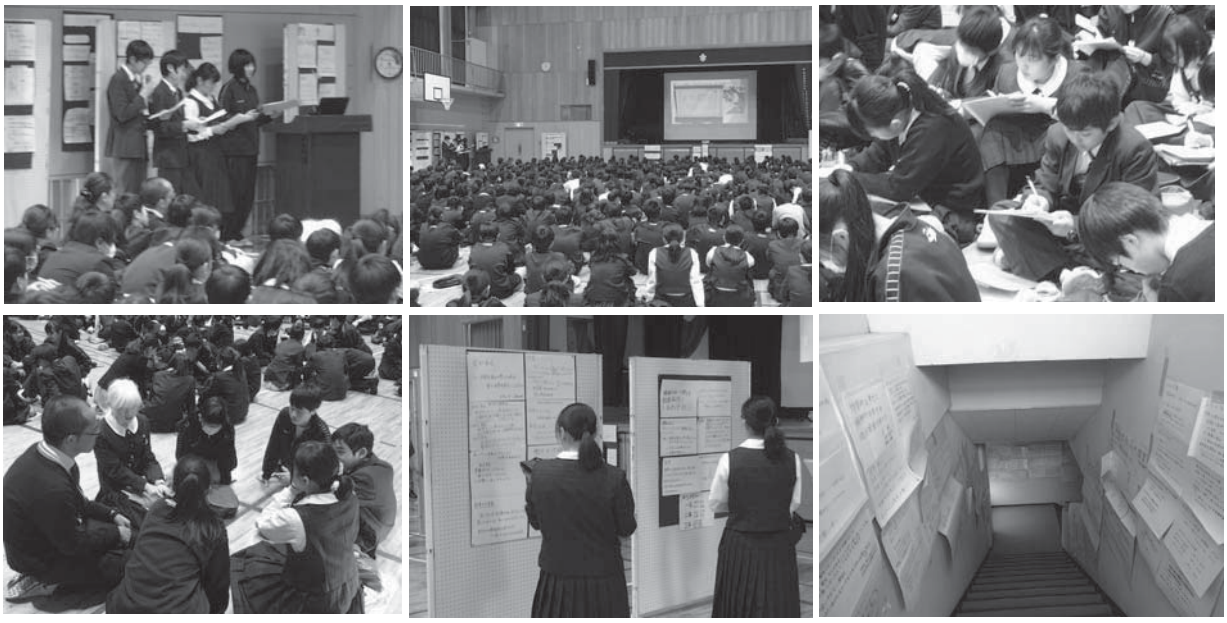


図 11　授業の様子②

⑶ 第３時：インタビュー計画［縦割り交流班・各教室］

① ねらい

○ 「しあわせ社会」とは何か，グループごとに協議する。

○ 附属中生以外の方は「しあわせ社会」をどのように捉えるのか，インタビュー計画を立案する。

② 準備

○ 教師：ワークシート

○ 生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

先生方へ（確認とお願い）

１ 進め方について

・先日配付した一覧に基づき，先生方と生徒はグループと教室が割りあたっております。活動時間にはその教室に集まり，教師と生徒がともに学ぶ時間を創っていきましょう。

・出張その他で不在になる場合は，こちらで代わりの先生を探します。事前にお知らせください。

◎50 分間はなるべく生徒が主体となって進行してください。教師は主にならず，ファシリテーターとしてグループ長の生徒とその他の生徒をつなぐ役割を意識していきましょう。しかし，指導しないということではありません。議論の方向性を見定め，然るべき場面では適切な指導をためらわずに行っていきましょう。

・グループ長が決まれば，50 分間をどのように進行していくか，活動前にグループ長の生徒と打ち合わせをお願いします。

・進行役の生徒は，うまくできないのが当たり前。「やろうとする姿勢」を尊重しつつ，その他の生徒もそれを受け入れ，異質な集団が一つのゴールに向かって粘り強く取り組んでいくチームワークを醸成できるよう，先生方でサポートしてあげてください。

２ 各時間の内容

第３時：４月２２日（月）４校時

１ グループ長，副グループ長の確認

２ 「しあわせ社会」のイメージを交流班内で個人発表（宿題だったワークシート）

３ 思考ツールを活用し，「しあわせ社会」のイメージについて交流班内で思考を拡散

４ インタビュー計画を立てる（大型連休期間のいつ，どこで，誰に聞くか）

第４時：５月８日（水）５校時

１ インタビュー結果の共有

２ 「しあわせ社会」の定義を交流班内で議論

３ 交流班における「しあわせ社会」の定義とその理由を決定

※３は次時までに必ず決めること。（昼休み等に集まって）

第５時：５月１０日（金）５校時

１ 「しあわせ社会」の定義について，交流班同士の発表

２ グループ全体による，共通点や重要度の検討

３ グループ全体による「しあわせ社会」の定義の決定

３　「創ること」についてのイメージ共有

・昨年度の「働きかけること」は，「とにかく社会を対象に何かしらアクションを起こそう」という意味合いが強かったため，内容の精査や働きかけたことへの検証などが疎かになっていた部分が否めませんでした。

・今年度は，「働きかけること」の対象は**より実社会を意識**してほしいこと，働きかけたことを，対象となった社会からフィードバックしてもらい，さらによくする（続けていくもＯＫ）ためにはどうしたらよいか，「社会とともに考える」というサイクルを回せたらいいな，と思っています。ここまで行うからこそ「社会とともに社会を創る」にたどり着くのではないかと考えます。したがって，提示した学習計画の後半は多少変更になるかもしれませんので，よろしくお願いいたします。

◎　この点は，総合部員会でさらに揉んでいきます。今年は，これまで以上に「先生たちとともにしあわせ社会を創る」ことを実践していきたいので，お知恵とお力をお貸しください。今年一年間，どうぞよろしくお願いいたします。

③　生徒の活動と学びの様子

第３時から，どの活動教室もグループ長が中心となって活動を進めていけるように，また，グループ長同士が短い時間でも情報交換を行えるようにするためにも，昼休みなどを利用してグループ長会議を行っていった。

第３時では，「しあわせ社会」について，グループごとに協議した。本校生徒の考え方は大切にしていくべき思いや考えではあるが，附属中生以外の方は「しあわせ社会」をどう捉えるのか，インタビューする計画を縦割り交流班ごとに立案した。ねらいをどのように設定し，どのような人にインタビューするのかについて，縦割り交流班ごとに計画を練った。

大型連休中に国内や海外の旅行に出かける生徒が予想されたため，総合的な学習の時間（グローバル市民科）の趣旨を考慮し，英語の学習で身に付けた力を実際に活用してインタビューしてくることも薦めた。身近な地域で生活されている方々との交流は大切だが，広範な地域で生活される方々の意見も大切なことを指導した。生徒は，インタビューすることの意義を理解し，家族，親戚，友達だけでなく，実社会で出会った方々にインタビューする計画を立てた。

図 12　授業の様子③

(4) 第４・５時：「しあわせ社会」定義付け①・②［縦割り交流班：］

① ねらい

○ インタビューの結果をグループで共有し,「しあわせ社会」の定義を決定する活動を通して,合意形成する力を養う。

② 準備 ○ 教師：ワークシート，掲示用シート，模造紙，資料

○ 生徒：ワークシート，グローバル市民科ファイル，筆記用具

③ 生徒の活動と学びの様子

第３時から第４・５時までの大型連休の時間を生かして,生徒は「『しあわせ社会』とは,どのような社会か」について，できるだけ多くの人にインタビューしてきた。第４・５時では，インタビュー結果を報告し合い,各グループにおいて「しあわせ社会」の定義付けを行った。インタビューによって収集した情報を共有し合い，必要に応じて思考ツールを活用しながら整理・分類していった。

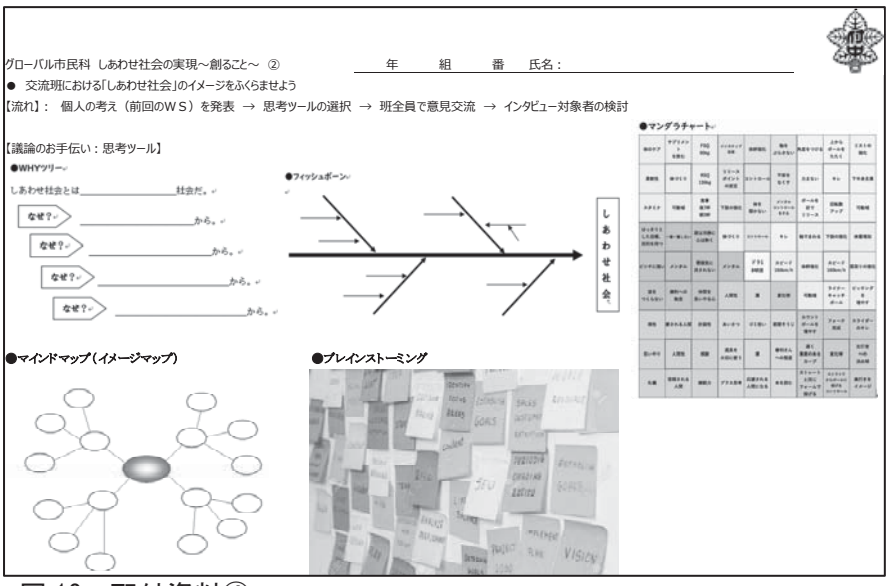


図 13 配付資料④

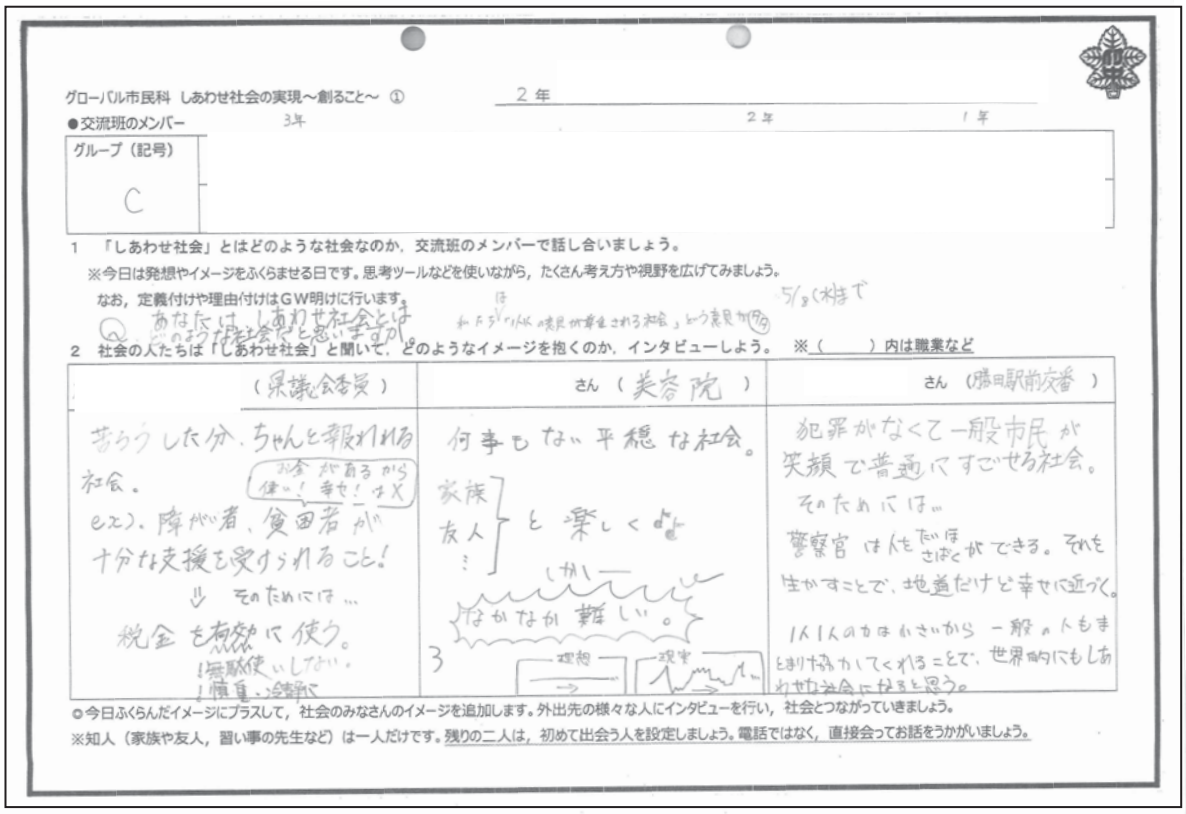


図 14 生徒のワークシート及び授業資料

本講座に限ることではないが，各教科や総合的な学習の時間（グローバル市民科）における取組を通して生徒が主体的に思考ツールを選択し，課題解決に向けて有効に活用できるようになってきたことは成果の一つである。本活動においても３年生を中心にしながら話合いを進め，各グループにおける「しあわせ社会」の定義付けが行われた。

令和元年度　グローバル市民科「しあわせ社会の実現～創ること～」 各グループの定義一覧					
	担当	グループ長		定義	その理由
A	菅谷	３－１		そこに愛がある	愛は心を豊かにする
B	久保	３－２		自分の幸せを広げられ，幸せの大切さと自分の存在意義を感じられる	自分の幸せを広げることで相手も幸せになり，身近にある幸せの大切さに気付くことや，自分が必要とされることは「しあわせ社会」につながる
C	井田	３－４		自己表現ができる，居場所がある	他人の意見に流されてしまっては幸せになれないし，そのための居場所が必要。そして，笑顔だと幸せであるから
D	佐藤道	３－４		社会的存在価値を感じられる	周りから認められ，自信がもてる
E	大森	３－１		個性に対しての差別をなくし，理解し尊重し合える社会	個性を理解し合うことで差別がなくなり，幸福が生まれると思う
F	庄司	３－３		全ての人が平等で，町中が明るい声で活気にあふれている	小さいところから発信されれば，大きなところまで届いて，結果的にたくさんのところで活気があふれるようになる
G	中村	３－１		自由と平和が共にある	争いがなく，一人一人の個性が尊重される社会になる
H	田尻	３－４		社会制度が整っている	社会制度が整っていると，安心・安全で余裕が生まれる
I	根本	３－１		全員が心から笑える場がある	心から笑うことは人と関わること。人が人と関わると幸せに感じると思う
J	近藤	３－１		平等で自由に生活できる	差別のない，考えを自由にもてる社会を創りたい
K	奥谷	３－２		平和な家庭のために，定時に帰って愛を育むことができる	しあわせには愛と平和が不可欠。特に家庭は生活のベースなので，家庭平和や家族愛は大切。そのためには，定時で帰れる社会のしくみをつくるべき
L	菊池	３－２		一人一人が充実している社会を創作できる	個人が充実した生活を送っている上で，社会全体を向上させ，居心地のよい社会を創り上げていく
M	矢吹	３－２		お互いを理解し合い，笑顔があふれる	個性を尊重し，毎日を楽しむことが大切
N	井上	３－１		互いの個性や意見を尊重し，共生できる	差別がない，自分の意見を認められると過ごしやすくなる，ということが今の社会に必要
O	安	３－４		みんなが互いを思いやれる	お互いを思いやるということでしあわせ社会となり，また，思いやるということで新しく「創る」ということができる
P	佐藤幸 鈴木	３－２		みんながルールを守り，笑顔で安心して暮らせる	ルールを守らないと，その行為によって不快な思いをする人がいて，みんなが幸せになれないと思った。笑顔であれば幸せにつながっていく。

図 15　授業の様子④

⑸ 第６時：探究すべき課題の設定［縦割り交流班・各教室］

① ねらい

○　定義付けた「しあわせ社会」に対し，自分の考えを表現する力を高める。

○　定義付けた「しあわせ社会」に対し，ＳＶの方々との対話を通して実社会の中で達成できていないことや不足していると思うことについて，多面的・多角的に考える力を高める。

② 準備

○　教師：ワークシート，掲示用シート，模造紙，資料

○　生徒：ワークシート，グローバル市民科ファイル，筆記用具

先生方へ

第６時の考え方

１　進め方について

・グループの定義は決まっていることを前提として本時があります。もし決まっていない場合は，このワークシート（ＷＳ）に進まず，しっかりと生徒が納得できる定義を決めさせてあげましょう。粘り強く，かつ責任をもたせることで，主体性が生まれてくると信じましょう。

・本時は，決定した定義と実社会の関わりや距離感について考えます。「しあわせ社会」が理想郷の夢物語で終わらぬよう，実社会に変化を与えていこう，という意欲をかき立てる 50 分にしましょう。

・定義づけた「しあわせ社会」と比較・対象としたい実社会は，社会の一部分です。広すぎるくらいの視野で捉えている「社会」を，50 分間でやや限定的に狭めていき，「働きかける」対象をしぼりやすくしていきましょう。その際，なるべく学校の外に目を向けていけると「創る」に近付いていくのではないでしょうか。
・大型連休中のインタビュー結果，ＳＶの方々の意見を参考にしながら，「社会」における理想と現実のギャップや共通点，達成できている状況など，情報を整理することで，これから何をすべきか見えてくる気がします。ＲＰＤＣＡサイクルのＲに向けた準備です。
・実社会について話し合うことで，実社会における様々な取り組みの話題（自治体の福祉活動，企業のホスピタリティ，国連やＮＰＯ法人の慈善事業など）になると予想しています。それらが問いを生み，「社会を創る参考例として調べてみたい」となったり，こういう企業とコラボしてともに「しあわせ社会」を創っていきたい，と考えたりする生徒が現れたら最高です。
・全校総合は，講座のシステム上，学校で調べ学習を行うことができません。自分たちの興味・関心があることは自分たちで時間を作って調べてくるのが当たり前，という思考を抱けるよう，ご指導をお願いいたします。それが主体的・対話的で深い学びにつながります。

２　ＳＶの方々の位置付け

・今回から各グループにＳＶが来てくださり，ともに学んでいくことになります。どのように関わっていくか，生徒やＳＶのニーズをよく聴き，担当する先生方がコーディネーターとしてつないでいきましょう。
・役割としては，グループに固定する，前方定位置にいていただき生徒がインタビューしに行く，机間指導してもらいながら生徒の質問に答えてもらう，積極的に生徒へ質問をぶつけてもらう，等々，様々な設定が考えられます。グループ長とよく相談してください。
・毎回同じ方が来てくださる，というわけではありません。SV の方々の都合など流動的な部分もあるため，その点は生徒とも確認しておきましょう。
・他の教室や空き教室から椅子を用意し，セッティングしてください。SV の方々はいつも前方にいて，生徒と同じ目線でいられるといいですね。

３　ワークシートについて

・担当の先生方でワークシートを回収し，サインやチェックをしてあげてください。なお，充実した記載のあるものについては，スキャンしておいてくださると，とっても助かります。

③　生徒の活動と学びの様子

第６時(6/13)の前にグループ長を集めて，現在の学習状況の確認と今後，総合体育大会や宿泊共同学習が予定されているため，今後の見通しの確認を行った。グループの定義や進め方などの確認をするなど，情報交換も行うことができた。

第６時では，附中ＳＶ制度を活用し，ＳＶの方々に活動教室に入っていただいた。定義付けた「しあわせ社会」について，実社会で生活されている立場から感じていることや思っていることなどについて意見をいただいたり，一緒に考えていただいたりした。ＳＶの方々は，何かの専門性に長けている方ではなく，実社会で生活されている一般の方をお願いした。在校生保護者が多

かったが，卒業生保護者も参加してくださった。卒業生の保護者の方も本校生徒の教育活動にあたっていただけることが，本校の附中ＳＶ制度の特色でもある。ＳＶの方々に活動教室に入っていただくことで，生徒が校外に出るよりも落ち着いた雰囲気の中で多くの対話をすることができ，充実した時間になった。ＳＶ，生徒ともに，決してＳＶの方々の意見が正しいということではなく，多面的・多角的に思考を深めていく手立てとして対話していくように事前に確認した上で進めていった。

しあわせ社会　グループ長の皆さんへ

総体を目前に控え，お忙しいところですが，グローバル市民科の学びも進んでいきます。みなさんのおかげで，各グループとも定義が決定し，順調な滑り出しだと思っています。

ただ，これから総体や宿泊共同学習などで行事が立て込み，しあわせ社会への意識が薄れていく気がしなくもないです。

そこで，この先の見通しをもてるよう，グループ長会議を開催させていただきます。

皆さまのご参加をお待ちしております。

日　時：　令和元年６月１２日（水）１３：１０～
場　所：　多目的室
ねらい：①全校総合における９月までの見通しをもつ
②各グループの方向性を議論する
③悩みや分からないことを共有する　等
その他：グループ長が参加できない場合は，副グループ長の誰かで代理を立ててください

第1回グループ長会議　　2019/06/12　13:10～@多目的室

☆「しあわせ社会の実現～創ること～」流れの見通し☆

1 定義の設定
2 必要な要素の抽出
3 現状の確認
4 「働きかけること」の協議
（6／13,6／28,7／3）
5 企画書の作成
6 「働きかけること」の実践
7 振り返りと課題の抽出
8 対象とともに，再度課題を解決する実践を行う
→ 社会とともに「社会を創る」

この流れは，一方通行ではありません。
学びを進める中で，うまくいかなかったり，よりよい方向性が見つかったりした場合には，前のステップに戻り，考え直しても構いません。
みんなの力と社会の力を合わせ，時間内に，よりよい活動を創っていきましょう。

★7／3 に，実社会における様々な方を学校に招き，みんなのアイデアを広げたり，「働きかけよう」としていることが当てはまるかどうか議論したり，と対話できる場を設定しようと考えています。
各グループでは，どのような人材を希望しますか？ 希望に沿えないこともありますが，せっかくの機会ですので，アプローチしてみたい人を挙げましょう。
→6／13（木）⑤は，前回のWS＋このことを話し合ってください。
希望する方（職種など）は，6／13 の放課後までに，担当の先生を通して滝本へ提出してください。

※ この方やその団体に対して働きかけるわけではありません。あくまで一緒に考える実社会の人，と思ってください。しかし，つながることで「この人（団体）に働きかけてみたい」と思い，その後の活動に生かしていくのも大歓迎です。

図 16　配付資料⑤

ＳＶの方々には，教室に入っていただき，各グループの話合いに参加していただいたり，最後に感想を述べていただいたりした。「自分は，○○と考えたり，感じたりしていますが，生徒の皆さんはどうですか。」と，自分の考えが結論ではなく，生徒と一緒に考えていく役割を果たしてくださったり，「私は，介護を経験してきましたが，その時の制度で最も大変だったことは，○○だったことでした。」などと，これまで様々な経験をされてきたことをもとに実社会の現状をお話してくださったりし，生徒の考えを深める役を担ってくださった。

グローバル市民科 しあわせ社会の実現 ～創ること～ ③　　年　組　番　氏名：
● 「しあわせ社会」を実現するうえでの理想と，現実の社会との距離感を考えよう
【流れ】： 班で定義を確認 → 実社会の現状をスクボラさんとともに振り返る → 「しあわせ社会」をともに創るために関わっていきたい実社会の候補を考える

◎グループで決めた定義
・私たちが考える「しあわせ社会」とは，＿＿＿＿＿＿＿＿という社会です。
なぜなら，
からです。

調べてみたいこと，聞いてみたいことなど…
（「しあわせ社会」とのギャップ or 実現できている部分）

しあわせ社会と
実社会を
比べて…

ともに社会を創りたい対象

社会に働きかけていきたいこと…

＜実社会の現状＞※ 各教科等で学んだこと，ニュース等で知っていること，スクボラさんとの意見交換で得たこと・・・

図 17　配付資料⑥

校外に出なければ意見をもらうことができないことや，生徒のみでは考えることが難しい視点からの意見をいただくことができた。学校内に実社会で生活している人たちを取り込むことで，生徒は，主体的に学びと向き合うことができた。ＳＶの方々からも，「（生徒が，）いろいろな立場の人にインタビューしてきていたので驚いた。」「しあわせ社会について，自分自身も考えたこ

とがなかったので，生徒の考えが参考になった。」などの感想をいただいた。

図 18　授業の様子⑤（ＳＶの方との事前打ち合わせ）

図 19　授業の様子⑥

(6) 第７・８時：働きかける視点の検証・吟味［縦割り交流班・各教室］

①　ねらい

○　有効な「働きかけること」を考案する力を養う。

○　どのような視点で，どこ（誰）を対象に働きかけるか，その効果は期待できるか，幅広く意見を協議しながら構想力を高める。

② **準備**　○　教師：ワークシート，模造紙

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

先生方へ

しあわせ社会　第７時のお知らせ

１　前回の進み具合から，今回は前時のワークシートを継続して使用します。理想の「しあわせ社会」と実社会の現実との差や共通点について，まとめられていないグループは，ワークシートをまとめてください。すでにまとめてあるグループは，それを基にどのような対象へ，どのような働きかけができそうか，原案を話し合うといいかと思います。

２　７／３に，様々な職種の方々を招いて，インタビューを行う機会を設定します。目的は，定義の妥当性を確かめる，実社会の現状をちがった視点で捉える，「働きかけること」のアイデアを相談する，などです。どのような方に来てほしいか，生徒の案を６／13 に出し合い，グループでまとめてください。下を切り取り，報告をお願いします。

＿＿＿＿＿グループが７／３に話を聴いてみたい方

③　生徒の活動と学びの様子

生徒は，第６時の学習を生かしながら，どのような働きかけを行うか，協議していった。定義付けた「しあわせ社会」に対して，前時でＳＶの方々にいただいた意見を考慮したり，実際に休日などを利用して調査したりした現状を踏まえて，実社会に不足していることを考えていった。前時に使用した模造紙なども活用しながら，構想を広げていくことを重視しながら進めることができた。

また，次の時間により専門的な方々と対話ができる場を予定していたため，対話したいＳＶの方の希望調査を行った。「しあわせ社会」の定義や定義付けの理由から，事前に予想される方々に依頼をしておくとともに，できるだけ生徒の希望に沿ったＳＶの方々をお招きできるように，ＳＶＣの協力も得ながら連絡調整を図った。

質問取りまとめ用紙

（＿＿＿グループ／活動教室＿＿＿＿＿／担当＿＿＿＿）

	質問 代表者名	質問相手	質問内容 FAX します。丁寧な文字で記入してください。
1			
2			
3			
4			
5			

○「質問したい」「一緒に考えてほしい」「相談にのってほしい」という方のみ，記入してください。

○担当の先生は，本日 28 日（金），小林まで提出してください。

図 20　配付資料⑦

図 21　授業の様子⑦

(7) 第９・10 時：働きかけの吟味・企画書の作成［縦割り交流班・各教室］

① ねらい

○　定義付けた「しあわせ社会」はどうすれば実現できるかについて多面的・多角的に思考・判断・表現し，縦割り交流班で「働きかけること」について合意形成する力を育む。

○　ＳＶの方々との対話を通して，「しあわせ社会」に対する考えを深めたり，自分たちの構想を練り上げたりする力を高める。

② 準備

○　教師：ワークシート

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

先生方へ

「しあわせ社会の実現～創ること～」

2019. 6. 28

〈第９･10 時／７月３日(水)⑤⑥〉　…質問を中心とした調査及び企画書づくり

□　質問に行く人は，集会室･多目的室･ＩＣＴルームへ

□　その他の人は，企画書づくりへ

【検討する視点】

□　実社会とともに「しあわせ社会」を創ろうとしているか

□　中学生ができる「働きかけ」となっているか

【予想される生徒の質問】

□　自分たちが定義付けた「しあわせ社会○○」について，どう思うか

□　自分たちが「働きかけ」をしようとしている○○について，どう思うか(意義や価値はあるか)

□　自分たちが考えている「しあわせ社会○○」などについて，実社会の現状はどうなのか

【ご協力いただけるＳＶの方々】

「“しあわせ社会”をめざして一緒に考えてほしい，相談にのってほしい」

と，依頼時にお願いしてあります。生徒の皆さんは，この機会を有効に活用し，自分たちの考えをより価値の高いものに練り上げていきましょう。　（※個人名は紀要内では省略）

	所属	立場・専門分野	お名前
1	財務省関東財務局	歳出(支出)	様 様
2	水戸税務署	歳入(収入)	様 様
3		企業・経営者	様
4	水戸京成百貨店	商店	様
5	茨城県	営業戦略部グローバル戦略チーム新市場開拓担当	様
6	水戸市役所	政策企画課	様 様
7	茨城大学	臨床心理・カウンセリング	先生
8	茨城大学	家庭・ジェンダー	先生
9	茨城大学	ものづくり	校長先生
１０	社会福祉協議会	福祉	様
１１		外国で働いていた人	先生
１２ ～	ＳＶＣ	主婦，介護経験者	様 様

※　その他，ＳＶＣの方々も協力してくださる可能性があります。

※　会場の配置については，当日，改めて案内します。13:30 から質問に行くか，一度教室に集まってから行くかについても，本日話し合っておきましょう。（13:30 頃は，人数が少なく，質問しやすいことが予想されます。）

※　前回質問票を出していないグループや生徒も，直接，会場に来ても大丈夫です。せっかくの機会になりますので活用させてください。

③　生徒の活動と学びの様子

本時は，集会室，多目的室，ＩＣＴルームの三つの会場を使用し，生徒が自分たちの考えを聞いてもらったり，働きかけが実社会に有効なのかをＳＶの方々と協議したりした。定義付けた「しあわせ社会」について意見をもらう生徒，ＳＶの方の立場から「しあわせ社会」についての考えを聞く生徒，「私たちは，〇〇のような働きかけを考えているが，不足していることはないか」などを質問する生徒など，ＳＶの方々と一緒に考えていただく時間となった。

「しあわせ社会」を創る上では，どのような取組を行うにも財政が関わることが多い。国や地方公共団体の歳入を担う税務署の方と歳出を担う財務省関東財務局の方々に，ＳＶとしてご協力いただいた。その他，できるだけ生徒にとって身近な地域で社会に貢献されている方々をお招きすることにした。行政では茨城県庁や水戸市役所の方，企業経営やＣＳＲの視点から代表取締役の方，少子高齢社会に関心をもっているグループのために社会福祉協議会の方，地域にある商店

の方など，多くの方々にＳＶとしてご協力をいただいた。臨床心理や男女共同参画社会がご専門の大学の先生方にも，ご協力をいただいた。「『しあわせを感じる』とは，どのようなことなのか」，本質的な質問を投げかける生徒もいた。校長先生や教員のブースも設け，「校長先生や先生は，どのように考えているのか」と，質問する生徒も見られた。

工夫点としては，できるだけ生徒にとって身近な方々に依頼したことである。地域の方，保護者や卒業生の保護者の方，生徒の制服を販売してくださっている方，これまで本校に学習支援（出前授業など）で講師を務めてくださった方々などである。本校の生徒の実態を少なからず理解してくださっている方や生徒の成長を感じてくださる方々に依頼した。生徒にとっても身近な方々のため，対話もしやすく，本筋とは異なる話も笑顔で交わしながら取り組むことができた。

主観的な印象ではあるが，学習を進めていく機械的な対話ではなく，ＳＶの方々に一緒に考えていただいたり称賛していただいたりと，あたたかい関わりを通して，生徒が自分自身に自信をもったり，自己肯定感を高めながら意欲的に活動しているように感じられた。ＳＶの方々も，全ての活動終了後に「楽しかった。」「こっちが元気をいただいた。若返ったようだ。」など，笑顔で感想を述べてくださった。「しあわせ社会の実現」に向けて，生徒はもちろん，教員もＳＶの方々も真剣に考える有意義な時間となった。生徒は，この活動を通して，企画書の作成にあたっていった。

グループ長へ ７／３（水）５・６校時の確認事項

１　２時間の使い方について

・本日お越しくださるゲストの方々は，休憩を除き２時間ずっと集会室・多目的室・ＩＣＴルームにいらっしゃいます。時間帯によっては混雑するかもしれないので，時間をずらす，他の方にも聞いてみる，「働きかけること」の協議や企画書の作成に時間を割く，等の柔軟な対応を考えてみましょう。

・同じ方に，時間を空けて２回以上質問に行くことは構いません。ただ，無計画に何度も行くことは印象が悪くなります。限られた時間で考えを深められるよう，慎重に判断してください。

・用意した質問がすべて聞けるとは限りません。限られた時間に多くの生徒が質問します。お互い譲り合い，協力し合い，充実した２時間を創り上げましょう。

２　質問のねらいについて

・相手はあなたが何を考えているか分からない（定義も含めて）状態で待っています。時間を短く，端的にこちらの考えを伝えつつ，的確な質問ができるよう，言葉をしっかり考えてからお願いしましょう。

・用意した質問をズラズラと並べると，質問される側は混乱してしまいます。会話するように，流れの中で聞きたいことを聞けるといいでしょう。

・他のグループが同じような質問をしていたら，同じ質問は繰り返さないように注意しましょう。「それに追加して」「それに関連して」など，補足の質問ならよいと思います。

３　企画書について

・夏季休業中に「働きかけること」が実施できるよう，この時間から企画書を作成していきます。分かったこと，分からないこと，活動すること，活動するためにやること，活動したいができないこと…など，様々なことが見えるはずです。

・７月は９日（火）６校時が最後です。この日に企画書が完成できるよう，今日たくさん考えを出し合い，９日にまとめていけると間に合うのではないでしょうか。

・「働きかけること」は，グループ単位で活動します。班で話し合い，その内容をグループで協議するもよし，始めからグループ全体で話し合いを進めるもよし，先を見通して検討しましょう。

図 22　配付資料⑧

図 23　授業の様子⑧（次頁に続く）

図 23　授業の様子⑧

(8) 第 11 時：企画書の検討［縦割り交流班・各教室］

①　ねらい

○　決定した「働きかけ」をいつ，どこで，何のための活動か，どのように行うか，企画書を立案・作成する力を高める。

②　準備

○　教師：ワークシート

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

先生方へ

しあわせ社会　本時の確認事項（2019/07/09　6 校時）

○　企画書の完成、提出

・企画書（個人用・グループ提出用）は先週配付済み

・個人用はポートフォリオとしてファイルへ保管する

・グループ提出用を誰かが記入し、提出（今日必ず！）

・途中でも必ず提出し、未完成部分は明日以降で話し合う

【企画書の項目】

○定義とその理由	○働きかける実社会の対象（企業・団体・地域等）	○働きかけることにより生まれる価値や効果
○実社会において定義に満たない部分（－を＋にする）	○候補日時（夏季休業中）	○今日から活動日までに行うべきこと
○実社会においてもっとよりよくすることで定義に近づく部分（＋を＋＋にする）	○活動場所	○役割分担
○附中生が働きかけることで，社会に効果を与えられそうな部分	○効果的と思われる働きかけ	○社会が創れたか検証する方法

○「働きかけること」の内容

・昨年同様，グループで一つです。班で一つにすると，対応しきれません。
・いつ，どこに，という項目は，先生方やＳＶＣが企業や団体へ連絡→決定していただきます。
・企画書を提出すれば，日程が決まる，というわけではありません。８月でも決まるかどうか不明，というのが正直なところです。
・日程調整ができなければ，９月に働きかけることもやむなし，と想定しています。

③　生徒の活動と学びの様子

前時までの学びを含めながら，今後，縦割り交流班で実社会に働きかけをしていく取組について協議した。縦割り交流班は，３～５グループが同じ「しあわせ社会」の定義のもとで活動している。全員で協議し，同じ場所，同じ内容で働きかけていくことを確認した。

前時におけるインタビューの内容から，生徒は自分たちが理想としている「しあわせ社会」を達成するためには，より具体的な活動を考えないと成果が実感できないこと，企業や団体の方は，対象を絞って様々な活動を行っており，それらが重なり合って社会ができていることなどに気付くことができた。そこから，自分たちが働きかける内容に具体性をもたせるため，まずは企画書を作成しながら，「働きかけること」のねらいや目標を改めて確認していった。グループの中には，定義から検討し直そうとするところもあり，生徒は自分たちが納得のいく活動にするためにじっくりと議論することができていた。

図 24　授業の様子⑨

(9)　第 12・13 時：働きかけ［縦割り交流班・各教室］

①　ねらい

○　各グループで企画書に基づいて活動し，粘り強く働きかける力を高める。

②　準備

○　教師：ワークシート

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具，用意した資料など

③　生徒の活動と学びの様子

第 12 時については，どのグループも企画書が完成していなかったため，活動内容や日時，生徒一人一人の役割分担，働きかけたことによる効果の検証方法まで，詳細に検討した。この段階になると，生徒は働きかけるイメージが具体的に想起できるようになってきたため，自分たちで決めた定義と働きかける内容に整合性が保てるよう，何度も繰り返し問い直したり，担当の先生に意見を求めたりして，働きかける内容を決定していった。

教師側からすると，実社会とつながるような働きかけとなっているかどうか，働きかけたことの成果を検証できるかどうか，先方は中学生の対応や受け入れが可能かどうか，という点についても考慮する必要があり，生徒の希望することと実社会における問題に折り合いをつけながら生徒と協議していった。担当教師の助言は生徒にとっては異なる視点からの意見となり，意思決定において重要な役割だったといえる。

第 13 時では，グループの進捗状況によって，①企画書が完成して働きかけることができたグループ，②企画書は完成したが日程調整等で働きかけられていないグループ，③企画書が詰め切れていないグループに分かれた。②，③のグループについては，どのような企業や団体に働きかけることができるか，質問や提案の内容を精査するのに時間を要した。これは，生徒の実態として，批判的思考や創造的思考を基にした議論は得意だが，時間内に意思決定までたどり着き，物事を前に進めようとする実行力が不足していることに起因していたと考えられる。また，各企業・団体やＳＶＣなど外部機関との連絡調整に，生徒がどこまで関われるか足踏みする場面もあり，実行にすぐ取りかかれない様子も見られた。一方，①のグループでは，第 12 時以降すぐに企業へ連絡を取り，趣旨を説明した後に生徒が店舗へ訪問し，働きかけることができたグループが多かった。ここでは，Ｂグループの活動を例に挙げる。

Ｂグループは，「しあわせ社会」の定義を「自分の幸せを広げられ，幸せの大切さと自分の存在意義を感じられる」としたＢグループは，「農業従事者が消費者の思い（購入の動機や感謝の念）を感じられれば，農家としての存在意義を感じられるだろう」と仮説を立て，地域のスーパーマーケットに「どのような思いで商品（野菜）を購入したのかシールを貼ってください」というボードを設置した。一週間の設置期間を経て多くのシールが貼られたことを喜びつつ，内容を分析していった。第 13 時におけるグループの話合いでは，消費者の思いは分析できたが，農家の方の意見を聞いていない，ということに気付いたため，近隣の農家の方にインタビューすることを決定し，働きかける対象が広がっていった。

このＢグループのように，学校内の身近な社会ではなく実社会に働きかけること，一度だけで終わらず，さらに「しあわせ社会」へ近付けようと活動できること，実社会から助言や意見を受けることで自分たちの働きかけを修正できることなど，昨年までの活動との差異や活動範囲の広がり，働きかけることの価値の高まりについて，活動を通して実感している発言が第 13 時から増加していった。これは，実社会へ働きかけたことで学校以外の方から自分たちの活動に対してア

クションが起こり，そこに意味を見いだしたり自分たちの定義する「しあわせ社会」に近付いたりしている実感や手応えを得られていたからと考える。

図 25　授業の様子⑩

(10)　第 14・15 時：検証・報告書の作成［縦割り交流班・各教室］

①　ねらい

○　企画書に基づいた働きかけと自分たちや社会の変化を客観的に振り返り，資料に表現する力を高める。

②　準備

○　教師：ワークシート

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

先生方へ

(1) 期　日　令和元年 10 月 28 日(月)

(2) 日　程　13:30～14:50　全校総合「しあわせ社会の実現～創ること～」第 14 時

(14:20～14:30　休み時間／基本的に休み時間は全グループ同一時間で設定する)

14:50～15:00　移動

15:00～15:15　清掃(※月曜日ですが，翌日から研究授業となるため実施)

15:15～15:20　ＳＨＲ(学年によりＨＲ)

15:40　下校完了

(3) 活動場所　各教室

(4) 事　前　①　働きかけを行っておく。(生徒・担当教師)

②　働きかけたことの結果をまとめておく。と，作業が早い。(生徒：グループ長(または副〃))

③　結果をまとめたものをグループの人数分，印刷しておく。(担当教師)

※①：働きかけができなかったグループは「実践できなかった」として，今後まとめていく。無理に働きかけを行わない(無理に働きかけを行っても，よい社会を創ることにはつながらないし，相手にも自分にもよい影響は生じないため)。定義付け，フィールドワーク，問題解決過程等において，何が良くなかったのかを検証することにシフトチェンジする。

※②：考察や検証にすぐに入れるようにするために資料をまとめておく。代表生徒が働きかけたグループは結果を知らない。口頭で説明されても分かりにくいことが予想されるため。事実だけをまとめておく。

※③：10 月 28 日(月)に資料として活用できるようにする。

(5) 当日(10/28)

◎　生徒一人一人が働きかけたことの検証(整理・分析)を行い，一人一枚のレポートを作成する。

①　本日のゴールを確認する。(全体)

②　働きかけたことの検証(整理・分析)を行い，報告書を作成(アイウについて記載)する。

※　各自，Ａ３枚サイズ１枚にレポートとしてまとめる(表現物の作成)。読み手を引きつける文章や見出し(国・社)，レイアウトやデザイン(美)，資料活用(様々な教科)など，創意工夫を凝らして作成する。現段階における中学校での学びの集大成としての１枚を作成する。(後々，昇降口に交代で全員のレポートを掲示)

※　報告書の用紙には罫線を引きましたが，そのとおりでなくても構いません。ただし，文字の大きさに注意して報告書を作成させてください。グラフ，図，イラスト，写真(担当の先生準備)など使用可。改めてあゆみ用の振り返りを記入することはありません。報告書を作成し，発表して終了としますので，きちんとした報告書を作成させてください。

※　(ここは先生方のみに理解してほしいことですが，)最終的には，学びに向かう，一つの社会に生きる，生徒自身の在り方や生き方にフォーカスポイントを絞っていかせたいと思います。よって，「大きな働きかけができたから良い」という訳ではなく，働きかけができたことはいいことですが，その学びを深めていく中で自分は何ができたのか，学びが深まらない中でも自分は何ができたのか，などについて考えさせてください。(「グローバル市民科の目標」や「高めたい力」を，先生たちが個に応じながら上手に活用していただけるとありがたいです。)

〈ア：定義付けた「しあわせ社会」名と設定の理由〉

・「設定の理由」については，各自の言葉，考え，解釈で良い。グループ全員が同じ言葉である必要は全くない。

〈イ：働きかけたこと，及び働きかけたことに対する検証(整理・分析)〉

・なぜ，そのような働きかけを行ったのか(定義との関係)

・実社会にとってどんな点で参画・貢献できたのか。または，できなかったのか。できなかったとすれば，何が良くなかったのか。どうすれば良かっ

たのか。

・自分たちが考えた働きかけを行っていく（例えば，継続していく）ことで，どのような社会への影響が期待できるのか。

〈ウ：講座を通しての自分の学びに対する検証（整理・分析）〉

・自分は異学年の他者と創る社会（縦割り小集団グループや教室グループ）の中で，何ができたのか。または，何ができなかったのか。できなかったとすれば，なぜできなかったのか。どうしていかなければならないのか。

(6) 10/28（月）以降の予定

○　30分ぐらいの時間でもいいので，レポートを完成させる時間を設定したい（学年主任の先生，集会委員会と相談）。難しければ，実習生の研究授業期間における，自習にせざるを得ない時間が可能なら進めさせたい。ただし，その際には，例えば，あるクラスは１時間とれたが，あるクラスはとれなかったということがないよう，生徒全員に同じ時間が担保されるようにしてあげたい（要確認）。

11／1（金）関附連の出張で人手が少ない日の活用でもよい（要相談）。

○　レポート完成後，発表会のグループを新たに作成する。レポートをもとに一人一人が自分の学びについて発表する（ＳＶ）。

先生方へ

今後の全校総合「しあわせ社会の実現～創ること～」の構想について（第２次案）

(1) 第15時

①　期　　日　令和元年11月27日（水）４校時

②　活動場所　各グループの教室

③　内　　容　レポート（報告書）作成（整理・分析②及び発表準備）

④　留 意 点

・⑤からＰＴＡ研修委員会主催の講演会があります。通常の④教科と⑤総合を入れ替えて実施します。

・働きかけをどうしても行いたいというグループは，この日までに実施可能です。

・この日が，レポート（報告書）作成の最終日になります。前回（10/28）話合い等を行っていたグループは，本日から当日までの時間を使って進めさせるのであれば，書き方の指導をお願いします。

・レポート（報告書）作成については，前回の資料を参考にしてください。生徒に任せすぎないように，何を，どのように記載するのか，特に留意すべきことは何か，改めて指導をお願いします。

・早くレポート（報告書）作成が終了した生徒に，タブレットを使用した作成を勧めてみてください。代表で１～２名程度でけっこうです（希望者が多い場合には，可能な範囲で対応します）。今後，学校の教育活動（外部発信，研究実践）等での活用に向けて，データによる保存版も作成できればと思っています。

→　保存は，取り敢えず生徒の USB メモリ等にお願いします。完成後，先生方が預かり，指定フォルダに保存しておいてください。

→　タブレット窓口：ＩＣＴルーム

・この時間をもって，先生方は担当生徒と学び合う時間は終了となります。約半年間，ありがとうございました。グローバル市民科は教師が教える時間ではなく，正解かどうか分からない課題や正解が一つとは限らない課題について，生徒とともに学び合う時間でした。できれば先生方からも担当生徒とともに学ぶことができたことや，自分の在り方や生き方について考えさせられたことなどについてお話していただければと思います(あくまでも，「自分は～を感じた(考えさせられた)」というスタンスです)。生徒は，教師が学びと真摯に向き合う姿からも，自分の学びを深めていくと思います。

～これより下の内容が，新しく付け足した内容～

○　堀　哲夫氏は，「学習の変容を知る意味」は，「どのような働きかけが適切であったのか，あるいは不適切であったのかを知ることができるから」と述べています。「学習者自ら学びの過程を確認すること」が，「学習において重要」であると主張しています。

○　梶田　叡一氏は，「『単元末の自己反省・自己評価』は，単元最後の時間に『自由記述の形でその単元の学習を全体的に反省させ，残された課題，今後に発展させていきたい課題，またそれらを家庭学習』や『後の単元で取り組むつもりか』を書かせる。」と述べています。

○　田中　耕治氏は，「自己評価とは，子どもたちが自分で自分の人となりや学習の状況を評価し，それによって得た情報によって自分を確認し今後の学習や行動を調整することである」とし，「『自己評価能力はメタ認知能力』と言い換えることができる」と述べています。

○　西岡加名恵氏は，「『生きる力』の育成について，『外的な評価に左右されるだけでは，環境の変化に柔軟に対応できない。』重要なのは，『自分がどこまでできていて，次に何を目指したいのか』という自己評価力，つまり自分と向き合える力をつけることが重要」と主張しています。

◎　以上より，(全ての教科における)振り返りを行うことは，学習者が学ぶ必然性を認識したり，学ぶ意欲を喚起されたりすることに結び付くこととなり，学習者が自己の学びの過程を通して，その意味や価値を獲得していくことになると考えます。振り返りにおいては，学習者が自己の概念の形成過程を自覚することが重要です。教育活動の中心とも考えられている総合的な学習の時間が果たす役割は想像以上に大きく，「メタ認知」の獲得によって，学習者は，自己の学習に意味を見いだすことが可能になります。また，教師は学習者の変容過程を責任をもって確認し，

必要に応じて授業改善を促されることになります。

◎　第 15 時の最重要ポイントは，教師が「振り返り」の意義を説明し，生徒に丁寧に深く「振り返り」を行わせることができるかどうかです(だからと言って，担当者がプレッシャーを感じる必要はありません。自分自身にとっても難しいし，生徒に伝わるかどうかはやってみないと分からないと思います。ただし，先生方には努めていただきたくは思います。先生方に伝えたいことは，それだけ「振り返り」は重要と言うことです)。話を戻しますが，あくまでもレポート(報告書)は「完成」が目的ではないことは，ご承知おきください。「完成」という言葉は，敢えて避けています。生徒に「完成」と投げかけてしまうと，生徒にとってのゴールは，「振り返る」ことよりも「完成」させることにすり替わってしまいます。「しあわせ社会」のレポート(報告書)は「完成」しなくても結構です(もちろん，放任を促すつもりはありません)。結果的には「完成」がゴールのように思われるかも知れませんが，生徒が自分自身の学習過程について真摯に向き合い，自分の姿(十分だった部分や不足している部分，今後についてなど)についてきちんと語る(自覚する・認識する)ことができれば，(極端な話ですが)白紙でも構いません。ただし，それは難易度が高いと思いますので，レポート(報告書)はメモのようなものだとお考えください。第 14 時の発表が目的(ゴール)でもありません。このような考え方は，内省(自己探究・自己更新)を促す学びを支援する上で大切なスタンスだと，(自分は)考えます。伝わるでしょうか･･･。

③　生徒の活動と学びの様子

生徒は，4 月から取り組んできた学びの成果を報告書(レポート)にまとめていった。「しあわせ社会の実現」に向けて，協働的に課題解決を図り，どのような働きかけを行ったのかは重要である。しかし，表面的な実社会との関わりだけではなく，自分が何を考え，「しあわせ社会の実現」のために異学年で構成するメンバーとともに何ができて，何ができなかったのか，なぜできたり，なぜできなかったりしたのか，今後どのような自分の在り方や生き方が望ましいのかについて，考察を記していった。

平成 29～30 年度は，縦割り交流班ごとに模造紙に記入する内容を分担してまとめていた。最終年度にあたる今年度は，個人で用紙やタブレットを使ってまとめていった。

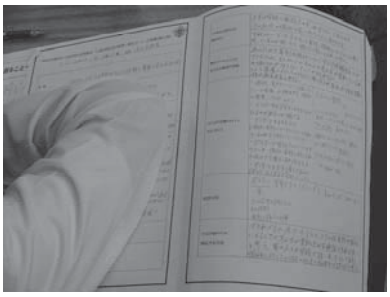


図 26　授業の様子⑪(次頁に続く)

図 26　授業の様子⑪

(10) 第 16 時：報告・最終振り返り［縦割り交流班・自教室］

① ねらい

○　報告会を通して，成果と課題を情報交換する。

○　各教科等の学びを生かせたか，自分たちで社会に働きかけることができるという実感が得られたか，この先も社会に関わろうとする意欲が高まったかなどの視点から，個人で振り返る。

② 準備

○　教師：ワークシート，掲示用シート，模造紙，資料

○　生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

③ 生徒の活動と学びの様子

生徒は，講座を通してはじめて自分の教室に戻って活動した。ＳＶの方々にも，教室に入っていただき，報告会の様子をご覧いただいた。縦割り交流班を活動母体とし，４月からの約７か月間，クラスとは異なるメンバーやＳＶの方々と学びを紡いできた。報告会では，互いに「しあわせ社会」の定義や働きかけたことが異なるため，発表に関心を抱きながら活動していた。働きかけた内容について「そんなことをしたの？」「どうやって働きかけられたの？」などと，質問も活発になされた。

本時は，講座の最終でもあるため，集いの時間を含めた 80 分間（５校時 50 分間＋集いの時間 30 分間）で実施した。集いの時間のはじめに，全校放送で発表した生徒２名は，「『しあわせ社会の実現』に向けて，紆余曲折をふみながら多くの学びを経験できたこと」，「『しあわせ社会』における学びを通して他人のしあわせはもちろん大切にするが，自分自身もしあわせになっていきたいこと」など，素直な気持ちを表現していた。

その後，各教室において行った意見交換会では，生徒だけでなく担任や学年主任，担外教師も感想を述べたり，ＳＶの方々にも「しあわせ社会」について考えたことを述べていただいたりした。意見交換会を含めた最終的な振り返りを記入し，全ての活動を終了した。

図 27　授業の様子⑫（ＳＶの方との事前打ち合わせ）

図 28　授業の様子⑬

7　検証

(1) 検証材料と検証方法

講座「しあわせ社会の実現～創ること～」(H31.4～R１.12 実施)において，第 14 時から第 16 時報告書(レポート)に設けた，生徒の最終的な振り返りの文章を検証材料とする。

学年ごとに分析していくが，その際に，持続可能な社会を創る資質・能力が培われたと検証できる記述部分に，アンダーラインを引いていく。

(2) 生徒の記述と分析

① 生徒Ａ（１年生）

今回，自分のグループでは検証はしていないけれど，実際に自己表現が難しい人，居場所が少ない人はとても多くいると思います。その働きかけの対象として，「特別支援学校に行こう」ということになりましたが，その対象(相手)が特別支援学校に限定されていたのは，あまり良くない方向へのイメージがあるというのがダメではないかということでした。

今回はうまく働きかけることはできなかったけど，やっぱり障害がある方への意識から変えていかなければいけないなと思いました。実社会では，障害がある方に対して差別的な対応が見られることが，最近とても多いです。この社会では，一人一人の気持ちを変えることが必要だと思っています。日本は戦争がなく，平和な国なのだなあと思っていたけど，その平和な国では特に最近，障害がある方への協力や外国へのボランティア活動など，平和でもやさしさというものが足りないように思います。そこが今の日本人のダメなところの一つだと思います。「平等」ということは，全世界が目指しているはずの目標だと思います。

この講座では，改めて現代社会のことについてより詳しく学ぶことができたと思います。最終的に改めて今の人々は，「平等」というワードがあまり理解していないなと思いました。そういった日本人の一人一人の意識から変えていく必要があるのではないでしょうか。一人一人の意識が変われば，きっと誰もがより暮らしやすくなる社会になるのではないかと思います。今回，「平等」の本当の意味が，やっと分かったような気がしました。

生徒Ａは，身近な地域で起きている偏見と世界で起きている不平等問題を関連させて考え，解決に向けて自分なりの考えを述べている。グローバルな視点で問題を捉え，周りの人や社会と自分との関係を考えながら，よりよい社会創りを尊重していこうとしていることが分かる。

② 生徒Ｂ（１年生）

私は，「しあわせ社会」の講座で，自由と平和が共にある社会に少しでも近付けるために，いじめについて意識をもってもらうように働きかけをした。そして，現状について知り，先生の話を聞いたり，小学校での対策や意識について調査したりすることで，自分自身も意識をもてるようになった。また，結果から，いじめに対して様々な対策や対応の仕方があり，意識が高いことが分かった。また，結果や検証を受けて，新たな問いがうまれた。「学校によって，意識に差があるのではないか」ということや，「学校によって，いじめの対策や対応のちがいがあるのではないか」などである。様々な視点から考えていくことで，自由と平和が共にある社会に近付いていくことができると思った。また，「しあわせ社会」の実現のためには，いじめや不平等をなくしていくことで，平和で「しあわせな社会」へと変えていくことが必要だと考えた。

今回の学びを通して，これからもいじめだけでなくインターネットへの意識や気を付けなければいけないことなど，日常生活で生かしていけるようにしたいと考えた。さらに，自分にできることをやっていくことで少しずつ社会を変えていけるように努力していきたい。最初は何も分からずにはじまった「しあわせ社会」の活動でしたが，様々な活動を通して様々なことを学び，理解していくことができたと思う。これからも，学んだことを生かしていけるようにしたい。

(※次頁に続く)

私たちが「しあわせ社会」，よりよい社会を創るための手助けができることが，良い学びになったと思う。「社会を創る」ことに貢献することができたと思う。そして「社会を創る」ことは，大事なことだと分かった。

私は今回の活動を通して，様々なことを学ぶことができました。定義について，しっかりと考えました。働きかけをまとめることで，改めて「しあわせ社会」の実現についても考えることができました。今まで，「しあわせ」とはどのようなことか，「しあわせ社会」とは何か，についてあまり考えたことはありませんでしたが，これから，日常生活でも意識しながら「しあわせ社会」の実現をめざしていきたいと思います。今回の学習を生かして，生活していきたいと思います。

生徒Ｂは，１年生であり２・３年生にリードされながらの学習であった。情報収集や整理・分析を進めていく中で新たな問いを見いだし，主体的で探究的に学ぶことができたことを振り返っている。また，本講座を通して学んだことを今後の生活にして生かしていこうと，自分の生き方や在り方についても考えをまとめている。

次に，昨年度より，講座「しあわせ社会の実現」に取り組んでいる２年生の振り返りをもとに，検証していく。

③　生徒Ｃ（２年生）

この講座を通して，私は集団で働きかけることの影響力や大切さなどを知りました。自分達が話し合ってインタビューをしたりして，企業などに働きかけたりすることで，少しは社会も変化するのではないかと思ったからです。インタビューをした時にも，インタビューをした人から中学生などの若い人は，個々の影響があると言われたので，実際，自分たちには影響力があると思いました。また，今回は働きかけを十分に行うことはできませんでしたが，今ある影響力を次の代の人達も生かして，「しあわせ社会」に貢献できたらよいのではないかと思いました。

「しあわせ社会」は，平和など漠然としたものを作っていくのではなく，今の社会や，身近な両親，友達など，自分の行動できる範囲の中で，精一杯努力するべきではないかと思いました。そこの身近な「しあわせ社会」からだんだんまわりに広がっていって，将来的には，日本がしあわせになり，そこから段々世界が平和になっていくと私は思いました。そういうことがこれからも広まっていけばいいと思います。

今までの「しあわせ社会」の学びを通して，話し合うことや意見の共有の大切さや楽しさを知ることができました。自分で考え，小さい班内で交流し，それを全体で討論し，自分とは別の意見や案などを知ることができました。また，それによって，より良いことを考えられる力がついたと思いました。

生徒Ｃは，人と人とがつながったり，関わり合ったりしながら生活していくことの影響力の大きさについて感じたことをまとめている。家族や友達と構成する身近な身の回りの社会から現代社会への空間的なつながりや後世の人とも創っていく時間的なつながりなどを大切にしながら，少しずつ「しあわせ社会」の実現を目指していこうとする意志が伝わってくる。また，問題解決に向けた協働的な学習の中で，新たな価値ある考えを創出する経験ができたと自己認識している。

④　生徒Ｄ（２年生）

今回，「社会制度が整っている社会」という定義を定め，視点を「税」にしぼりました。様々な事を考えた上で，「税」というものは社会をより良くしていくため，社会構成を整えるためには，不可欠であると思いました。また，財務局の方にも話を聞いて，社会制度の維持のためや利用の制限ができないところなどに税金が使われていることが分かりました。社会制度がなければ公共施設などもなく，不自由なく暮らすことは難しいと知ることができました。

（※次頁に続く）

今回は，(視点を「税」にしぼったために)働きかけを十分に行うことはできませんでした。もし，もっと働きかけを行えるのなら，少しでも多くの方に，税の役割や税があることの大切さを伝えることができるのではないかと思いました。最近，消費税が10％になり，税金について不満をもつ人も多くいると思いますが，今の人々が払っている税金によって，社会制度の質が上がっていき，更により良い社会になると学びました。今の私たちにできることは少ないかもしれませんが，今後の社会のために，税について考えることは，私たちにもできることだと思います。働きかけが行えなかったのは残念ですが，一人でもできることから始めて，より良い社会を創るために貢献していきたいです。

今回，各グループにより，(「しあわせ社会」の)定義は違いましたが，それぞれの目標は「しあわせ社会の実現」というところで，同じ一つの目標に対して深く考えることができて良かったです。実際に十分な働きかけをすることはできませんでしたが，「しあわせ社会」を創るために何をテーマとして活動するか，どのような働きかけをすればよいか，考えることができるようになりました。これからは，自分がどう行動するかが大切だと考えました。今後，「しあわせ社会」を創るために，一人でも何か行動して社会に貢献していきたいです。

生徒Ｄのグループは，財務局の方との交流を通して「税」にかなりフォーカスして進めていたため，実社会に対する働きかけが難しく，十分に実践することができなかった。このことを，**生徒Ｄ**は振り返りの中で三回記述しており，悔しかった様子が伝わってくる。**生徒Ｄ**は，「一人でもできることを…」と考え，これから社会に参画・貢献していきたい思いを記述している。現在の中学生段階においては限界があるが，将来的によりよい社会を創るために参画・貢献していこうとする意志が確認できる。

⑤　生徒Ｅ（２年生）

今回，私達は「いじめ」に着目して働きかけを行った。主な小中学校では，「いじめ」をなくすために様々な取組を行っているが，なかなか無くならないのが現状である。また，だいたいの学校で行っていることが「ポスターをはる」ということだ。しかし，今回の検証で，「ポスターをはる」だけではあまり効果がないのではないかということが考えられた。なぜなら，ほとんどの生徒がポスターに目を留めないからだ。私自身も右のようなポスターがはられていたとしたら，気付かずに通りすぎてしまうかもしれない。やはり「ポスターをはる」だけでは，影響がないのだと思う。

そこで私達が考えた対策は，生徒が主催のいじめに関する集会を開くとうことだ。生徒が主催して様々な訴えをすることで，主催する側も，それに参加する側にも，強い印象を受けるのではないだろうか。生徒のいじめをなくすためには，生徒自身が自ら行動をおこさなければいけないと思う。この活動が，まずは自分が住んでいる地域，県，そして全国へ広まっていけばいじめも減り，「しあわせ社会」に一歩近付くことができると考えた。

私は，この講座を通して，「自由」と「平和」とは何だろうかと考えてみた。実際，私自身は，様々な自由が与えられ，毎日平和な日々を過ごしていると思う。しかし，広い視野をもってみると，周りには「自由」ではないと感じていたり，何かの争いごとの被害にあっていたりする人もいるのかもしれない。みんなが「しあわせだ」と感じていないと，「しあわせ社会」は創ることができないと思うので，「しあわせ社会」を創るためにできることを積極的に行なっていきたいと感じた。

「しあわせ社会」とは人それぞれにとって違い，それを創るためには，たくさんの働きかけを行なわなければいけないと思う。今，実際には，「しあわせ社会」と感じていない人もいるので，この講座で学んだことを今後実行し，私達が「しあわせ社会」を築き上げなければと感じた。

生徒Ｅは，身近な地域で起きている問題に関心をもち，その解決に向けて容易に結論を出すのではなく，主体的に判断し，今後も責任をもちながら関わっていこうとしていることが分かる。「しあわせ社会」は人によって異なるため，その実現は難しいことは前提としながらも，多くの働きかけを行いながら，粘り強く身近な社会と関わっていこうと，自分の生き方や在り方について深い決断をしていることが分かる。

⑥　**生徒Ｆ（２年生）**

私はこの講座を通して，自分たちが考えていることや思っていることを，大人の人たちに伝えることがどれだけ大切かを実感しました。私たちは，結局，時間内に十分に働きかけることができたとは思いませんが，それで終わりという形にしないで，これからどうしていくのかを考えることが大切なのだと思います。

人それぞれの「しあわせ社会」の中で，私たちのグループは，「家族」に視点をおいて考えていきました。「家族」という一つの社会は，私たちの軸になっているものです。それは私たちにとって不可欠なものであり，社会においても大切なものです。考え深いものがありましたが，自分たちなりにはよくまとめられた(学ぶことができた)と思います。

今年度の講座では，「創ること」ということを目標にしてきました。昨年度は「働きかけること」でしたが，働きかけるだけでなく，その先の「創る」という所までやらなければなりませんでした。私たちが実践した働きかけに対して，対象者の人たちにどのような変化があり，社会的な変化があったのかどうか，自分たちでしっかりと分析し，少しずつ「しあわせ社会」につなげられるようにしていきたいです。また，アンケート調査によって明らかになったことを，さらにみんなに広げていけば実感がわくし，自分たちへのいい刺激にもなると思うので，そういう形でも意識を高められればいいのではないかと思います。今回は，学びの検証を行うことが難しかったけど，これからに生かせるように取り組んでいきたいです。

「しあわせ社会」を形成するためには，小さな集団のしあわせがどんどん広がっていって，みんなの「しあわせ社会」につながっていくのかなぁと考えました。よって，私たちが少しでも今の活動を拡散していけば人々の心に届くし，しあわせを無理やり押し付けるのではなく，サポートとして続けていきたいです。「しあわせ社会」の学びを通して，色々な人とふれあうことができたし，考えも交流できて視野を広げて意見が述べられるようになりました。

生徒Ｆは，人との「関わり」や「つながり」の大切さを実感し，振り返りをまとめている。単に働きかければいいということではなく，自分たちが取り組んだことに責任をもち，周りの人や社会に対してどのような影響や変化を起こすことができたのか，きちんと見極めていこうとしている。また，講座における他者との学び合いの中で，自分の考えを表現し，多様な他者と織りなす社会に主体的に参画・貢献していけるようになった喜びについてもまとめている。

最後に，平成 29 年度からの３年に渡って，本講座に取り組んできた３年生の振り返りをもとに，検証していく。

⑦　**生徒Ｇ（３年生）**

私は，自分たちで「しあわせ社会」の定義から考え，他学年や他クラスの人とも一緒に活動しながら，その「しあわせ社会」を創り上げていくことができたと思います。最初は，私たちの「しあわせ社会」の定義である，「社会的存在価値を感じられる」という事は，不可能であると思っていました。ですが，少しでも私たちが思う「しあわせ社会」の実現に向けて，様々な工夫をしました。かん板の文字を大きくしたり，来てくださ

(※次頁に続く)

ったお客さんに積極的に呼びかけをしたりです。その結果，アンケートでは，79.5%もの人が案内サービスを役に立ったと感じてくれたり，72.3%もの人がこのインフォメーションで社会的存在価値を感じることができたり…，という結果につながることができました。この講座は一度これで終了だけど，今後も，私たちが考える「しあわせ社会」である，「社会的存在価値を感じられる社会」を目指していきたいです。

3年間の「しあわせ社会」における学びを通して，人には，それぞれ自分が思うしあわせの形があり，そのしあわせの形に 100%なることは不可能だけど，少しでも近づこうとすることが，「しあわせ社会」なのだと

生徒Ｇは，３年間の学びを通して感じたことや考えたことを振り返ってまとめている。定義付けた「しあわせ社会」は難しいこととは承知しながらも，働きかけを行う切り口や具体的な手立てに対して様々な工夫をしたところ，予想以上の成果が生じたことで自信や自己肯定感が高まったようである。他者を思いやって働きかけていくことの影響力を実感するとともに，理想を追究することが「しあわせ社会」の実現に近付いていくことを感じていることが分かる。

⑧　**生徒Ｈ（３年生）**

今回の「しあわせ社会の実現～創ること～」を通して，「しあわせ社会の実現」には，まだ遠いと感じました。私たちの定義である「社会制度」というのは沢山の項目があり，どの項目であれば誰もがしあわせになるのかという問題に悩みました。交通機関・医療・福祉・税・社会保障・教育と何個もありましたが，私たちにも関係する「税」に視点を当てることにしました。これからの社会は少子高齢化が進む一方です。高齢者に視点をあてると，これからの社会をしあわせに保てるのではとも考えました。社会制度が整っていれば，人々は安心・安全で余裕が生まれるからです。

私たちが「しあわせ社会」を創り上げるためには，“理解”というキーワードが大切になってくると考えました。理解して，伝えて，創り上げるということが，私たちには必要なことではないかと分かりました。今回，Ｈグループとして定めた定義は，時間内に働きかけることはできませんでしたが，その後の働きかけをしたことで，私たちの将来的にも高齢者からしても，「ここは，しあわせ社会だ」と言えるような社会を創り上げられたのではないかと思います。「しあわせ社会」を創るためには，どのような方法が相手にとって効果的か，そのためには何を1番伝えるべきか，ということを考えてきました。深い学びへとつながったので，良かったと思います。これからの社会がどうなるのか，予想することは出来ません。しかし，私たちの時代がやって来るので，私たちも社会の一員として「しあわせ社会」を創り上げられたら良いと思います。

(3年間の学びを通して，)さまざまな人に視点をあて，当たり前の生活の中にあるしあわせの要素を見つけることができました。今回は，一つの視点から社会について考えることができたので，私たちが「しあわせ社会」を創り上げていきたいと考えた。

生徒Ｈは，他者との関係性を重視し，個に応じた社会制度を整えていくことの難しさと大切さをまとめている。その上で，「理解」という言葉をキーワードに挙げている。多様性を尊重することが求められる現代社会において，改めて一人一人が互いに理解し合おうと歩み寄って生活していく態度が重要であることを述べている。

⑨　**生徒Ｉ（３年生）**

今回，“互いの個性や意見を尊重し，共生できる社会”という定義で「しあわせ社会」を考えてみて，まず一番大事なのは，「対等な関係」を築くことだなと思った。障害がある人でも，高齢者でも「～してあげる」など，支える側の方が上である感じにするのではなく，一緒に考える相手（障害者，高齢者）の気持ちに寄り

（※次頁に続く）

添う(考え，理解しようとする)ことを重視し，「対等な関係」を築いていく。そういうことが必要だと分かった。私の周りには高齢者はもちろん，障害者もいるし，バスでもよく附中の近くの施設(●●●：施設名)に通っている障害者もいるので，その人たちと関わるときには，その人の気持ちに寄り沿い，「対等な関係」を築けるようにしようと思った。

しかし，この社会では，まだまだ障害者に対する偏見や高齢者に対する偏見？があるし，どう接すればよいのか分からないという人も多いと思うので，今日学んだことを多くの人にも伝えるためには，どうしたらよいのか考えたいなと思った。

私は3年間，「しあわせ社会」について考えてみて，まだまだ差別，偏見，紛争などやめなければいけないし，なくさないといけないことがたくさんあることが分かった。それをなくさないかぎり，「しあわせ社会」(誰もが，しあわせに暮らせる社会)は創れない。だから，今回考えたように，解決法を考えるだけでなく，それ

生徒Ｉは，身近な地域で共に生活している社会的弱者と言われる人たちと自分(たち)との関係性について言及し，解消しなければならない差別や偏見に対して，どのように働きかけていくべきかについて考えを深めている。**生徒Ｉ**にとって，３年間の本講座における学びの中で明らかになったことは，「差別や偏見を解消しない限り，『しあわせ社会』は実現しない」ということだった。よりよい社会を創っていく上で，人と人との「関わり」や「つながり」を大切にしようとしている姿と捉えた。

⑩　**生徒Ｊ（３年生）**

私は自分とは立場が違う人や，立場が上の人のために働きかけることを，はじめは少しためらっていた。自分が共感できる立場ならば貢献できる考えが出るが，自分とは違う立場，そしてまだ経験していないことを改善することは，どのように働きかけたらいいのかが分からなかった。しかしこの講座では，“中学生”という立場だからこそ効果が出て，働いている人とは逆の待っている人の立場から働きかけることはすごく大切なことだと分かった。私たち中学生でもできることはあり，この世の中に貢献することは可能だと実感した。

私は今まで，立場が違うからできない，共感しにくいからよくわからないと思い込んで避けていた。でも，真逆の立場だからこそ，相手の心にひびき，また，呼びかける側の人も強い思いをぶつけることができる。これからの世の中は，今よりももっとたくさんのジャンルの人が活躍したり，新たな分野の人が世界を動かしたりするかもしれない。年代も広くなっていくと思う。外国人との交流も活発になるだろう。そんな時代を創り上げていく私たちだからこそ，今回の講座で私が学んだことを生かしていきたい。全然違う趣味だから分からない，何を言っているのか分からない，と思う気持ちも生まれると思うが，実は真逆な者同士がよい組み合わせなのかもしれないという考えを忘れたくない。

しあわせを創ることは簡単ではないし，この3年間で本当に「しあわせ社会」に近付けたかは分からないけど，3年間たくさんの人と考えた時間は，私の未来に何か役に立つような経験だったと思う。たくさんの人と考えた様々なしあわせを，何かは生かせるように今後生活していきたい。

生徒Ｊは３年間の講座を振り返る中で，自分の在り方や生き方について考え方が変わっていったことを実感している。少子高齢化やグローバル化の進行など，多様な価値観が混在する社会の中で，自分の生き方の一つの基軸となるものをつかんだようである。本来であれば，避けてとおりたくなるような自分とは異なる立場の人への働きかけを大切にし，逆に異なる他者との関係を「よい組み合わせ」と前向きに捉えながら，よりよい社会を創るために参画・貢献していきたいと述べている。

抽出生徒の振り返りが中心ではあるが，３年生は他者との関わりをとくに重視してまとめている傾向があった。他者が生かされてこそ自分も生かされる社会であること，自分自身も大切にしながら生きてこそ社会全体のしあわせにつながっていくこと，そのような「しあわせ社会」の実現に向けては，多様な価値観を有する他者の存在を認めていかなければいけないことを述べている記述が目立った。どのような働きかけを行おうとも，対象として考えた他者を理解することに努め，その働きかけを行う中で自分自身の「よさ」や「らしさ」を発揮していこうとしている姿と捉えた。

以上より，各学年の抽出生徒の振り返りにおける下線部からは，持続可能な社会を創るための資質・能力が培われたと捉えた。

⑶ ＳＶの方々の感想

第 16 時(最終時)に参加してくださったＳＶの方々は，講座「しあわせ社会の実現」をどのように感じたのだろうか。ＳＶの方々の振り返りを，第三者による評価として示す。

○　３年４組の「しあわせ社会」の活動に参加しました。グループごとに，とても仲良く楽しそうでした。私がウロウロするのがかえって邪魔だろうなと思いました。いない方が率直に話せたかなと…。とても活発に意見交換ができていました。計画したようにできなかったことも，ハキハキ言っていたのが素直で良いなと思いました。３年間のまとめなので，ものすごく濃くて楽しかったです。ありがとうございました。

○　私自身，納得しながら発表を聞いていました。「しあわせ社会」だけでなく，「わが家庭」でも共通する問題(相手を尊重する，個々の個性を大切にする)などに対し，子供と同年代の意見が聞けて良かったです。いつもお疲れさまです。ありがとうございました。

○　子供たちのプレゼン力が昨年より格段に up していると実感しました。「しあわせ」についてクラスメイトと語り合う機会は貴重です。お互いにどんな風に考えているのか知ることは，互いを理解する第一歩だと思うので，どんな成果があるかないかにかかわらず，とても大きな学びになったと思います。

○　子供の話合い風景を近くで見られて良かった。発表(自分の)は良くできていた。人の発表に対してもう少し質問(させる工夫)があると良かったかなと思った。班の意見が自分の考えと一致していないけど，それを受け入れる柔軟性と順応性があると感心した。この学びが今後に生きていくといいなと思う。

○　３年２組を担当しました。全体にまとまりを感じるクラスでした。話合いに向け，進行していく態度，先生やＳＶ(大人)に対して関わる態度に附属中３年生らしさを感じました。「しあわせ社会」について，３年にわたり，私自身も関わりを通じて考えることが出来，幸せに思います。子供たちが「しあわせ社会」について考える時，まず，人のことを思いやり，立場の弱い人や自分より小さい子，お年寄りに目を向ける優しい子たちであることに，「しあわせ社会」を築いていく希望の光を感じます。ひとつ加えるなら，ＴＶ放送の佐藤さん(生徒代表)が話してくれたように，二つめの「自分自身のしあわせも大切にしていきたい(自分も社会の一員なので，自分のことも考える)」のように，自分自身もしあわせにならないと社会全体がしあわせになることはないので，自分自身のことも大切に人と繋がりながら「しあわせ社会」を築いてゆけるよう，これからもいつも考えながら成長していって欲しいと思いました。ありがとうございました。

○　社会に対して問題意識をもって，さまざまな視点や分野で話合いをしてきた様子が伺えた。自分が中学生の頃は，社会に対して考えたことなどなかったので，皆とても良い経験になったと思う。今回の各チームの「しあわせ」の定義を意識して生活することで，今までになかった気付きが子供たちにあるといいなあと願っています。
○　活発に意見が出て，良かったと思います。
○　いつもお世話になり，ありがとうございます。子供たちが様々な角度から意見を述べている姿にとても成長を感じました。「しあわせ社会の実現」という，とても難しいテーマだと思います。人の意見を聞き考える，とても有意義な時間でした。家庭でもこれを機に，家族で話題にできたらと思います。今日はたいへんお世話になりました。
○　今日のチームはとても活発なクラスで質問もしやすく，楽しく参加いたしました。私もまた「しあわせ社会」について考えたいと思いました。

繰り返しサポートしてくださった。改めて感謝したいことは，生徒と一緒に考える対話役を担ってくださったことである。生徒の中には，不十分なバックデータの中で独自の考えを述べたり，偏った見方や考え方をしたりしていることもあったかもしれない。そのような状況の中でも，生徒の話に頷き，自分の考えを伝え，一緒に考える役を担ってくださった。教員との対話では，生徒は受け身になってしまうことがあるが，ＳＶの方々だからこそ素直な気持ちで対話することができることもあった。ある特定の職業や経験をされている方々との対話は，生徒の主体的な学びによい影響があったと考えるが，一般の男性や女性，学生との対話も「しあわせ社会」を考える上では重要であり，生徒の学びを支えてくださったと捉えている。

８　研究のまとめ

(1)　成果

○　実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの研究に向けて，附中ＳＶ制度や大学の協力を得ながら，学校内外の人的資源を有効に活用し，具現化を図るために生徒の学習支援を行っていただき，生徒の持続可能な社会を創る資質・能力を培うことができた。

○　学校と社会が一つの目標を共有し，ＳＶの方々に繰り返し学校に足を運んでいただきながら，継続的に学習プログラムに参加していただき，生徒の学びを支えてもらったり成長を見守っていただいたりする実践を行うことができた。これらにより，生徒は社会や人と自分との「関わり」や「つながり」を感じながら，今後の身近な地域や世界の姿と自分の生き方や在り方を関連付けて振り返ることができた。

○　専門的な立場の方にＳＶを依頼した際には，受動的に話や説明を聞くのではなく，生徒から「私たちは○○のように考えているのですが，☆☆の立場の方からはどのようにお考えですか。」と質問したり，一緒に考えていただいたりするような方法を取った。生徒は繰り返し質問をしたり，納得がいくまで説明を聞いたりすることができた。ご協力をいただいたＳＶの方からは，「生徒が生き生きとしていて，こちらが元気をもらえた。」「中学生と自分の（職業の）立場から対話できる機会はないので，新鮮で嬉しかった。」「生徒は，とてもよく考えていて驚いた。（そういう風に考えるのか…と，）こちらが勉強になった。」などの感想を何度もいただいた。学校を気遣っての感想ということも承知ではあるが，ＳＶの方々にとっても，「しあわせ社会」について考えるよい機会となった。

○　平成 30 年度は，実社会への働きかけが弱かったという課題が残った。令和元（平成 31）年度は，

「働きかける対象を明確にするとともに，検証する」ことを改めて確認し，教員も生徒も意識しながら学びと向き合うことができた。しかし，それでも働きかける対象がまとまらなかったり（妥協できなかったり），十分な働きかけに至らなかったりした縦割り交流班もあった。

そのような状況の生徒においても，実社会や他者との関係性を大切にしながら，今後の自分の生き方や在り方について考えていたり，講座が終了しても働きかけたりしていこうとする意志があることが振り返りで明らかになった。

○　生徒がリーダーとして話合いを進行し，意志決定までもっていける力を身に付けたことで，学びの自立につながるとともに，教師のファシリテーターという役割に対する重要性の認識につながった。また，毎時間のねらいや核となる考え方は教員間で共通理解を図り，到達に向けたアプローチの仕方は，担当教員（縦割り交流班）に一存した。思考ツールの活用，話合いの進め方，成果物の作成などにおいて各専門教科の特性が生かされており，教員同士で学び合う研修の場にもなった。

○　検証は難しいが，平成 29 年度から今年度までの３年間の実践を通して，生徒の課題解決力が向上したように捉えている。もちろん個人差はあるが，情報収集，情報の整理・分析，表現などにおいて，意欲や活動の質が高まった印象を受けている。教師が本プログラムの進め方に慣れてきたことも要因として考えられる。

(2) 課題

●　実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムにおける考え方や構想は，総合的な学習の時間（グローバル市民科）のみで取り組むのではなく，各教科等の学習においても実践化を図っていきたい。学校における学びと実社会との接続を実感できるように工夫したり，主体的な態度で実社会に参画・貢献したりできるような生徒を育んでいけるようにしたい。

●　ねらいや構想に応じた「附中ＳＶ制度」や大学の活用を一層図っていくとともに，その効果を検証していきたい。

●　働きかけの方法については，縦割り交流班が主体となって行ったが，一人一人が計画を立て，実践していきたかったという生徒の声もあった。働きかける先方との連絡調整や個別指導における時間的な制約から難しいが，理想的な声でもあった。協働的に学び合うからこそできること，協働的に学び合うからこそ制限されることを見極めて，対応していけるようにしていきたい。

【文献】

○　安彦忠彦「“コンピテンシー・ベース”を超える授業づくり－人格形成を見すえた能力育成をめざして－」図書文化社，2014 年

○　佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」1995 年, 岩波新書

○　佐藤郡衛，佐藤裕之「『共に生きる子ども』を育てる国際理解教育」2006 年, 教育出版

○　佐藤学/木曽功/多田孝志/諏訪哲郎「持続可能性の教育―新たなビジョンへ―」2015 年, 教育出版

○　髙木展郎「“これからの時代に求められる資質・能力の育成”とは―アクティブな学びを通して―」2016 年, 東洋館出版社

○　多田孝志「グローバル時代の対話型授業の研究―実践のための 12 の要件―」2017 年, 東信堂

○　中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会，2015 年

○　東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会「カリキュラム・イノベーション―新しい学びの創造へ向けて―」2015 年, 東京大学出版会

○　奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」2017 年，東洋館出版社

○　Ｊ．デューイ，阿部斉訳「現代政治の基礎―公衆とその諸問題―」，岩波書店，1969 年

総合的な学習の時間「グローバル市民科」全体計画

〈21 世紀の社会〉
- 国際化社会
- 情報化社会
- グローバル化社会
- 多文化共生社会
- 産業の高度化　など

〈生徒の実態〉
- ○学力が高い
- ○社会で生じている事象への関心が高い
- ○実践をやり遂げようとする意志がある
- ●公共心が育っていない
- ●身近でない人に対し，思いやりに欠けることがある

【本校の目指す生徒像】
より高い価値をめざし　たくましく実践し　ともに向上する生徒

【グローバル市民科の目標】
横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して，日本や日本人のよさ及び，多文化を尊重しつつ，共生することの大切さを深く理解し，グローバル化時代において問題を見いだし，解決する能力をもち，様々な他者と関わりながら，よりよい未来の実現に向かって主体的，創造的，協同的に行動していく態度を育て，自己の在り方や生き方を考えることができるようにする。

【グローバル市民科でめざす生徒の姿】
グローバルな視点に立って社会を見つめることができ，日本や日本人のよさ及び多文化を尊重しつつ，共生することの大切さを深く理解している生徒。
グローバル化時代における問題解決能力をもち，様々な他者と関わり，よりよい未来の実現にむかって，主体的，創造的，協同的に行動し，自己の在り方や生き方を考えることができる生徒。

〈教師・生徒の願い〉
- 主体性
- 協調性
- 責任感
- 使命感
- 共感力
- 自己肯定感
- 複眼的思考力
- 未来創造型思考力
- 批判的思考力
- 判断力
- 実践力
- 行動力
- 各教科等における知識・技能
- コミュニケーション力
- 自己表現力

高めたい力

つかむ力	創り上げる力	働きかける力
○　自ら課題を見いだし，解決への見通しをもつ力 ○　他者との関わりを通して，自分を適切に見つめ，今，自分が何をすべきかを把握する力 ○　課題意識をもった対象について問い続ける力	○　多面的・多角的な視点から情報を収集し，必要な情報を取捨選択しながら構想を練り上げる力 ○　ネットワークをつくり，それを活用しながら創造する力	○　自分の思いや考えを分かりやすく伝える力 ○　自分の思いの実現に向けて行動する力

手立て　問いを大切にする展開　他者との学び合い　表現の場の設定　社会との連携　ポートフォリオ評価と支援

講座の目標

各教科・特別の教科　道徳・特別活動

学年(時数)	対象	問題を解決する力に関すること	共生への理解に関すること	主体的，創造的，協同的な態度に関すること	自己の在り方や生き方に関すること
第1学年(34)	世界・地域・自分	**この地球に生きる** 環境問題に立ち向かい，グローバルな視点から問題を見いだして解決する力を身に付け，持続可能な開発を進めようとする態度を培う。	**手をつなごう** 障害がある方の立場になって物事を考え，判断する活動を通して，様々な人と共生していく態度の基礎を培う。	**わたしたちの日本の文化** わたしたちの日本の文化の良さを理解・実感し，その良さを他国の人などに主体的・創造的に伝えていく態度を培う。	**健康な生活を考える** 「健康」とは何か，年齢，身体，精神など様々な視点から多面的・多角的に議論することを通して，自己の在り方や生き方について考える。
第2学年(54)		**この地球に生きるⅡ** 環境問題に立ち向かい，グローバルな視点から問題を見いだして解決する力を身に付け，持続可能な開発を進めようとする態度を培う。	**安心の基準を考える** グローバル化社会における「安全」と「安心」の基準について議論する活動を通して，様々な立場の意見を尊重しつつ，主体的に判断する力や態度を養う。	**『問い』の必要性** 「問い」の必要性を理解し，「『問う』ことを問う」哲学的思考を通しながら，様々な見方や考え方から課題を見いだし，解決する力を養う。	**豊かさとは何か？** 「豊かさ」をテーマに，留学生との交流や異文化体験活動を通して，国際社会を豊かに生きていくために求められる自己の基軸となるものを養う。
第3学年(54)		**附属中のよさを伝える** 附属中のよさを多面的・多角的に捉え直し，発信する活動を通して，課題を見いだし，解決する力を育てる。	**災害の国に生きる** 過去の災害について捉え直す活動を通して，社会の一員として災害に備えながら共生していく態度を育てる。	**未来社会に生きる** 未来社会を生きるために，自らの学びを生かそうとする活動を通して，確固たる自己の基軸となるものを確立する。	**哲学すること** 自分自身の存在について，対話をしながら探究する活動を通して，自分自身の価値を見いだし，確固たる自己を確立する。
全(16)		**しあわせ社会の実現　～創ること～** 理想の社会（しあわせ社会）を目指し，現状との差異や課題を見いだし，その解決に向けて働きかけることで社会に参画・貢献し，これからの自分の在り方や生き方について考えを深める。			

令和元年度　総合的な学習の時間（グローバル市民科）　年間活動構想表

茨城大学教育学部附属中学校

【グローバル市民科の目標】
横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して，日本や日本人のよさ及び，多文化を尊重しつつ，共生することの大切さを深く理解し，グローバル化時代において問題を見いだし，解決する能力をもち，様々な他者と関わりながら，よりよい未来の実現に向かって主体的，創造的，協同的に行動していく態度を育て，自己の在り方や生き方を考えることができるようにする。

【めざす子どもの姿】
グローバルな視点に立って社会を見つめることができ，日本や日本人のよさ及び多文化を尊重しつつ，共生することの大切さを深く理解している生徒。グローバル化時代における問題解決能力をもち，様々な他者と関わり，よりよい未来の実現にむかって，主体的，創造的，協同的に行動し，自己の在り方や生き方を考えることができる生徒。

【高めたい力】
Ⅰ　自ら課題を見いだし，解決への見通しをもつ力。他者との関わりを通して，自分を適切に見つめ，今，自分が何をすべきかを把握する力。課題意識をもった対象について問い続ける力。〈つかむ力〉
Ⅱ　多方面から多くの情報を収集し，必要な情報を取捨選択しながら構想を練り上げる力。ネットワークをつくり，それを活用しながら創造する力。〈創り上げる力〉
Ⅲ　自分の思いや考えを分かりやすく伝える力。自分の思いの実現に向けて行動する力。〈働きかける力〉

		４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
活動計画	第１学年（34 時間）	部員会 学年会 企画会 校務会 等における今年度の運営計画の編成と方針の確認	「この地球に生きる」 〇環境問題を解決するための課題の設定 ・環境問題に関する調査 ・大人へのインタビュー ・三年間探究したい課題の設定 ☆持続可能な開発を進めようとする態度		「手をつなごう」 〇共生社会の実現に向けて自分ができることは何か ・障害の疑似体験及び支援方法の調査 ・特別支援学校との交流 ☆人格や個性を尊重し合おうとする態度			「健康な生活を考える」 〇健康な生活の定義の決定 ・健康な生活の定義をグループで協議 ・スクールボランティアへのインタビュー ☆健康を通してよりよい自己の在り方や生き方を考えようとする態度		「わたしたちの日本の文化」 〇日本の文化の発信 ・日本と他国の文化の調査 ・他国の人に向けて伝統文化を紹介 ☆日本の文化に関する問題の解決に向けて主体的に行動しようとする態度			部員会 学年会 企画会 校務会 等における今年度の反省と来年度に向けた準備
	第２学年（54 時間）		「安心の基準を考える」 〇様々な立場の意見から安心の基準を分析 ・「安心」と「安全」の違いについて議論 ・その道のプロから学ぶ（警察，食品，消防） ・自分の「安心」の基準を設定 ☆様々な立場の意見を尊重しつつ，主体的に判断する力や態度		「豊かさとは何か？」 〇「豊かさ」の本質の追究 ・豊かさの関連項目の優先順位を議論 ・地域の豊かさの調査 ・統計，図表資料の活用 ☆国際社会を生きるための自己の基軸			「『問い』の必要性」 〇対話を通して，自己・他者の考えを深め合う ・哲学的な問い「本当の自分ってなんだろう」 ・設定した「問い」に関する疑問をインタビュー ・トークセッションをして，答えを出す ☆様々な見方や考え方から課題を見いだし，解決する力			「この地球に生きる」 〇環境問題を解決するための課題の設定 ・地域のために実践する ・環境保全活動の実践を振り返る ☆持続可能な開発を進めようとする態度			
	第３学年（54 時間）		「附属中のよさを伝える」 〇仮説を立てて検証する活動 ・仮説の設定 ・仮説を検証するためのインタビュー活動 ・検証した内容を批判的に捉え議論する活動 ☆課題を見いだし，解決する力		「災害の国に生きる」 〇災害に主体的に関わり，互いを尊重し合いながら生きていく ・「自助」「共助」「公助」とは ・どんな人と「共生」しているのか ☆「共生」への理解			「哲学すること」 〇「人間・自分とは何か」について問い直す ・自分の考えを表現する。 ・他者に傾聴・共感する。 ☆自己の在り方や生き方を見つめ直す			「未来社会に生きる」 〇未来社会の変化と影響について考える ・予想される変化と影響について話し合う ・人間の在り方について見つめる ☆主体的，創造的，協同的に取り組む態度			
	全学年（16 時間）		「しあわせ社会の実現～創ること～」 〇「しあわせ社会」とは何か　〇「しあわせ社会」を実現するにはどうしたら良いか　〇「しあわせ社会」の実現に向けて地域社会に働きかけよう ・社会との意見交換　・異学年での話合い　・地域社会の見つめ直し　・社会に対しての具体的な働きかけの実施　☆社会へ参画・貢献しようとする態度の形成										
探究のプロセス			〈スパン①〉 課題設定 ▶ 情報収集 ▶ 整理分析 ▶ まとめ表現 課題設定場面を重視 ・自分との関連性のある課題設定 ・自分の生き方につながる課題設定		〈スパン②〉 課題設定 ▶ 情報収集 ▶ 整理分析 ▶ まとめ表現 情報収集，整理・分析場面を重視 ・多角的な視点（年代，外国人，地域） ・多様な情報の整理・分析技術			〈スパン③〉 課題設定 ▶ 情報収集 ▶ 整理分析 ▶ まとめ表現 まとめ・表現部分を重視 ・プレゼンテーション技術 ・学習の再構築			〈スパン④〉 課題設定 ▶ 情報収集 ▶ 整理分析 ▶ まとめ表現 これまでの学びを総合して ・可能な限り，講座を通して個の力で ・自分の在り方や生き方を見つめ直して			

高めたい力のフェーズ

つかむ	創り上げる	働きかける
自ら課題を見いだし，解決への見通しをもつ力	多面的・多角的に情報を収集し，取捨選択しながら自分なりの考えをもつ力	自分の思いや考えを分かりやすく伝える力
自分を適切に見つめ，今，自分が何をすべきかを把握する力	必要な情報を取捨選択しながら，構想を練り上げる力	自分の思いの実現に向けて行動する力
課題意識をもった対象について問い続ける力	ネットワークをつくり，それを活用しながら創造する力	自分や他人の思いの実現に向けて粘り強く行動する力

〈年間活動構想表の見方〉
□　活動計画
「」：講座名　，〇：中心課題
・：主な活動，☆：育成する資質・能力
□　探究のプロセス
スパンにより，重視する場面を変えることで，総合的に力が伸びていくよう配慮。
□　各教科等との関連
ⅠⅡⅢ：【高めたい力】におけるⅠⅡⅢと関連

各教科等との関連	
国　語	Ⅰ様々な文章を読み，社会生活と密接に関わる問いを見いだす。　Ⅱ資料を根拠として活用したり，経験的事実から論拠を示したりして論理の妥当性を導く。　Ⅲ記述した文章やプレゼンテーションなどを通して社会に働きかける。
社　会	Ⅰ多面的に資料を読み取り，課題を見いだす。　Ⅱ地理や歴史，公民の学習と関連付けながら，多面的・多角的によりよい解決策を話し合う。　Ⅲ人間の営みに対して尊敬の念を抱き，受け継いでいこうとする。
数　学	Ⅰ既習を基にし，見通しをもって問題解決する。　Ⅱ相互に関連付けて，統合・発展する。　Ⅲ根拠を明らかにし，筋道立てて説明する。
理　科	Ⅰ自然の事物・現象の中から課題を見いだし，見通しをもって観察，実験を行う。　Ⅱ観察，実験結果を吟味する。　Ⅲ観察，実験結果を分析，解釈して，自然の事物・現象を解明しようとする。
音　楽	Ⅰ演奏をよりよくするための課題を明確にする。　Ⅱ演奏をよりよくするために，身につけた知識・技能や表現方法を活用する。　Ⅲ身に付けた技能や表現方法を生かして思いを演奏にのせて伝える。
美　術	Ⅰ作品のテーマを再構築し自分の表現主題を決定する。　Ⅱ表現に必要な発想や技能を考え，選択しながら制作を行う。　Ⅲ学び合いや鑑賞を通して，自分の考えを表現したり，他者の考えを取り入れたりする。
技術・家庭	Ⅰ生活や社会における問題を見いだし，課題を設定する。　Ⅱ課題の解決方法について，ペアやグループで最適解を議論し，決定する。　Ⅲ獲得した知識や技能を用いて製作・制作・育成し，その結果を振り返る。
保健体育	Ⅰ豊かなスポーツライフを実現するための課題を見つける。　Ⅱ課題解決に向けて練習の仕方やゲームの進め方を工夫する。　Ⅲ運動やスポーツを通して様々な関わりを実践する。
外国語	Ⅰ英語でコミュニケーションにおける課題を見いだし，他者と関わりながら解決への見通しをもつ。　Ⅱ英語を用いて物事を様々な角度から捉え，課題の解決に生かす。　Ⅲ身につけたことを生かして，英語で思いや考えを伝える。
道　徳	Ⅰ日常生活の中から道徳的な問題を見いだす。　Ⅱ道徳的価値について多面的・多角的に捉え，自分なりの考えをもつ。　Ⅲ道徳的価値について考えたことを，日常生活に生かそうとする。
特別活動	Ⅰ望ましい集団活動を通して，学校生活における問題を見いだし，課題を設定する。　Ⅱ課題解決を通して，学校や学級におけるよりよい生活づくりに参画する。　Ⅲ社会の一員として自分にできることを見つけ，実践する。